
2019年2月

美術分野における新潟市内組織基盤の形成と 新たな可能性に関する調査研究その2

アーツカウンシル新潟((公財)新潟市芸術文化振興財団)「文化芸術基盤整備促進支援事業」助成

調査を終えて(結果と考察)

はじめに

本調査はアーツカウンシル新潟(公益財団法人 新潟市芸術文化振興財団)「文化芸術基盤整備促進支援事業」の助成を得て、認定NPO法人新潟絵屋がおこなった。昨年(2018年)1月から3月にかけて新潟市域の美術をめぐる総合的で正確な現状把握を目的に「美術分野における新潟市内組織基盤の形成と新たな可能性に関する調査研究 その1」(以下「前回調査」)としておこなった調査の継続、および補完するものとして実施したものである。

前回調査の対象は主に美術作品の作り手たちが中心となっている美術団体・グループと、美術作品を展示・販売する場を運営している画廊であった。このうち美術団体の全てが「高齢化と後継者難」という課題を抱えていると回答。また「これまでの古い美術でなく、現代アートなども取り入れていく」方向の必要を吐露する記述があった。また「画廊」が関わる「美術」の少なからぬ部分が、その記述がいうところの「古い美術」と目されるものであり、「現代アート」と上記の記述に書かれた、いわば「美術における新しい動き」の新潟市における姿が、前回調査の結果にはあまり反映できなかったと考えた。

そのことをふまえ、前回調査の対象とした美術団体の構成員に比して、より若い世代の美術に関する意識や感情を把握し、また上記の「現代アート」の新潟市における浸透・影響の状況などを探るために、今回は「古い美術」「現代アート」などとなんらかの重なりや接点をもちつつ、活動をおこなっている比較的若い人々による個人、ユニット、グループと、その活動を担う個人を調査対象とすることにした。

その背景としては、「高齢化と後継者難」に直面する(前回調査の対象とした)美術団体に対応する若い世代の美術団体やグループの存在を、残念ながらほとんど把握できなかったこと、その一方で「美術団体」ではないが、なんらかの形で美術的な性格をもつ多様な活動に関する情報が、近年増加してきたことがあった。

調査の表題に掲げた「美術分野における新潟市内組織基盤の形成と新たな可能性」を今後考えていく場合、既存の美術の枠組みのみの調査だけでは、ことに「新たな可能性」について議論する素材、資料としては不十分と感じた。また今回の調査結果にも反映されているように、「美術」は近年、その意味を実質的に広げつつあり、概念としての新たな再編期を迎えている。この拡張された意味での美術に対応する視点をもって、現実の状況を率直に見つめることが、「新たな可能性」についての議論を意義あるものに行うことができると考えた。

なお今回の調査は、美術的なものと多様な活動との関わりをより重視し、対象とした個人、ユニット、グループの構成員の年齢は厳密には規定しなかった。しかし回答をいただいた方々の過半は20~40代の人々であったため、全体としては前回調査とは異なる年齢層の意識を探る調査ともなったと考えている。

前回調査と合わせて、結果を公開することで、新潟市域を軸に美術活動に関わる人同士の情報の共有を図り、互いの理解、交流、連携へ向けての議論の基盤の提供となれば幸いである。

■調査対象について

今回の調査は認定NPO法人新潟絵屋が把握した情報に、アーツカウンシル新潟から提供された教示をもとに15の活動体(個人、ユニット、グループ)とその構成員である個人を対象に実施した。

4つの活動体で複数の構成員が回答に応じてくださったため、回答者総数は22となった(但し、活動体自体に関わる質問に対する回答は15)。

15の活動体の活動内容は、別添資料に記載したとおりいずれも多様でユニークなものである。前回調査の対象のうちの美術団体のほとんどが既存の美術ジャンルをベースとした制作者のグループであり、形態も同好会や愛好団体、あるいは他地域のそれと類似の組織の形をもつものが多いと考えられたことと比較して、対照的である。

この活動内容の多様さは、これらの活動体の多くが、既存のジャンルや美術概念を基盤とするのではなく、構成員「個人」の感性や、個々の人生の履歴、行き当たった問題、あるいは時代の課題などに対する具体的な解決の模索などを出発点に発足していることに由来すると考えられる。

こうした多様さは、調査対象の全体的イメージの提供が困難であるということでもあるが、調査結果を読み解く上で、ある程度の全体像の把握が必要と考え、若干恣意的な試みとなるであろうことをお断りしつつ、幾つかの切り口から、15の活動体を紹介する。

活動体の名称は下記の通り(50音順)

1 「Art unit OBI」

美術作家と建築家のユニットで、社会解決にとりくむ。

2 「株式会社T-Base-Life」

空き家の活用に取り組む。アートの催しもおこなう。

3 「越人会」

空きビル活用に取り組む。アートの展示スペースとしても活用。

4 「小須戸コミュニティ協議会特別委員会『薩摩屋企画委員会』」

町屋を町歩き拠点として活用し、アートプロジェクトも展開。

5 「タクミクラフト」

新潟の伝統工芸の魅力を県内外と世界に発信。

6 「手部」

手でものをつくる「部活動」として発足。アートと普通の人々をつなぐ柔軟な活動をおこなう。

7 「特定非営利活動法人いわむるや」

地域の交流施設を運営。アートの催しも開催。

8 「新潟と会」

「新潟と」関わりのある多様なテーマで、毎年催しを開催。

9 「西堀ゆきわ」

多様な人々で運営するシェアショップ。ミニギャラリーも併設。

10 「浜メグリ」

クリエイターの工房を公開する町歩きイベントを定期的に開催。

11 「ヒッコリースリートラベラーズ」

「日常を楽しもう」をコンセプトに創作、デザイン、店舗などの活動を展開。

12 「BOOKS f3」

写真展も開催する、写真集専門書店として活動。

13 「Bricole」

地域、土地に根ざした文化を取材し、さまざまな形で発表する。古民家の一角で展示もおこなう。

14 「べつのみかたプロジェクト」

生活から生まれ実用以外の価値を見出されなかったものを「造形」の視点から見つめ直し、文化の多様な理解へつなげる活動をおこなう。

15 「まちごと美術館」

障がい者のアート作品のレンタルをおこなう。

■地域との関わり

今回の調査対象とした活動体のうち、「特定非営利活動法人いわむろや」「浜メグリ」「小須戸コミュニティ協議会特別委員会『薩摩屋企画委員会』」「株式会社T-Base-Life」はいずれも西蒲区岩室、同越前浜、秋葉区小須戸、中央区天明町という地域を基盤に活動している。

「いわむろや」は武蔵野美術大学と岩室地域との共同のプロジェクトを機縁に発足した施設であり、その運営団体(*1)だが、「交流の場づくり」の一環として温泉街岩室の地域拠点として多様な活動をおこなうなかで、昨年(2018年)は障がい者の表現を紹介する「岩室あなぐま芸術祭」を開催した。

「浜メグリ」はもともと越前浜で生活・制作する工芸作家たちの「オープンアトリエ」的イベントとして始まり、現在は地域に人々を呼び、回遊してもらうことに主眼を置く地域イベントの性格を強めている。

「小須戸コミュニティ協議会特別委員会『薩摩屋企画委員会』」は衰退が懸念される小須戸の町歩き拠点としての古い町屋の活用の一環として、独自の展示やアートプロジェクトを実施している。

「株式会社T-Base-Life」は空き家問題という現代の課題と向かい合う中で、実際に天明町の空き家をリノベーションし、それを触媒に地域全体を再生させようとする取り組みを行っているが、そのなかにアーティストが関わるワークショップ、展示などがある。

また「Art unit OBI」の活動は、市外の芸術祭への参加など特定の地域に限定されていないが、そもそもは南区月潟での住人たちとの対話や、地域の古い建物の公開と、そこでのアートプロジェクト実施などを出発点に発足したユニットであり、現在も拠点を同地に置いて月潟との関わりへ強い関心を持ち続けている。

「西堀ゆきわ」「ヒッコリースリートラベラーズ」「BOOKS f3」はいずれも中央区の西堀前通り、古町通り、沼垂地区に店舗を構え、拠点としている。また「越人会」も中央区医学町にある古いビルの活用により、学校町・医学町・古町の活性化に寄与したいと考えており、いずれも地域との関わりが深い。「西堀ゆきわ」「ヒッコリースリートラベラーズ」「BOOKS f3」「越人会」はいずれも画廊(ギャラリー)活動を行っている活動体だが、画廊活動は活動体の活動の一部に組み込まれている。「BOOKS f3」は前回調査では画廊の一つとしてアンケートおよびヒヤリングに応じていただいたが、「写真集専門の書店」がメインの活動であることから、今回再び調査対象とさせていただき、回答をお願いした。

■時代の課題1 空き家・歴史的なものの再評価

前回調査で新潟市の画廊の特徴として「歴史的建造物をリノベーションした展示会場が多い」ことを挙げた。今回の調査対象とした活動体の拠点も「西堀ゆきわ」「ヒッコリースリートラベラーズ」「BOOKS f3」「小須戸コミュニティ協議会特別委員会『薩摩屋企画委員会』」「株式会社T-Base-Life」はいずれも戦前、または戦後まもない時期に建てられた木造建築である。また「浜メグリ」が活動をおこなう西蒲区越前浜も古い集落で、イベントで公開される建物の多くは伝統工法で建てられた古い木造建築である。これらは「歴史的建造物」という「文化資産」として見られる(評価される)ことがある一方、老朽化し、住み手を無くした家＝「空き家」として、全国的な社会問題ともなっている当該の建物だったものでもある。空き家対策は深刻な時代の問題であり、これらの活動体は、それぞれの形でこの問題に取り組み、その解決への試みを行っているとも見ることが出来る。「空きビル」の活用に取り組む「越人会」も同様である。

また、これらの取り組みを「歴史的資産の再評価」ととらえるなら、新潟県下の伝統工芸の魅力の発信を活動目的とする「タクミクラフト」との共通性が浮かびあがる。伝統工芸は「美術」の範疇に半ば迎え入れられ、半ば疎外されてきた歴史を持つ。「タクミクラフト」の活動はこの疎外からの回復の取り組みであり、さらに伝統工芸の技術と、現代のアーティストとの協働を仕組み、その成果物(*2)を発表するなど、美術の先端と、美術が疎外してきたものの回路の創造をおこなうなど、既存の伝統産業振興とは一線を画する試みもおこなっている。「地域の歴史・土着文化の拾集、土地に根ざした生業や暮らし」の取材や発表活動をおこなう「Bricole」もまた、違った独自の角度(視点)から地域の歴史的資産の再評価をおこなうユニットと見ることが出来る。

■時代の課題2 障がい者と社会とのつながり

もうひとつの時代の課題として、近年クローズアップされるものに、障がいを抱える人と社会のつながりがある。クローズアップの現象には2020年の東京オリンピック、パラリンピックとの関係性が指摘されるが、それだけではない、より普遍性を持つ時代の課題でもあることは間違いない。障がい者の絵画のレンタル活動をおこなう「まちごと美術館」の活動は、この課題への真正面からの取り組みのひとつである。前述の「特定非営利活動法人いわむろや」による「岩室あなぐま芸術祭」も同様である。

障がい者と社会とのつながりは、視点を広げるならば、体も心も多様な人々が共生できる社会の形成という課題の一部と言えるだろう。「多様で豊かな思いや活動する人々が集い、それにより周囲をも豊かにしていける場になりたいという思い」で生まれた空間「西堀ゆきわ」もまた、この時代の課題への取り組みのひとつと考えることができる。

■市民プロジェクト・水と土の芸術祭

今回対象となった活動体には「Art unit OBI」「新潟と会」「べつのみかたプロジェクト」など、新潟市が2009年から実施してきた「市民プロジェクト」への応募をきっかけに発足したものがある。「市民プロジェクト」は2009年の「水と土の芸術祭」(新潟市)において「地域

プロジェクト」として公募されたものを始まりとし、通常の文化活動助成とは異なり、地域の魅力の発見、発信などをおこなうプロジェクトに対し原則100%（但し上限あり）の資金助成を行った（*3）。これにより資金調達の困難に煩わされる通常の助成事業以上に、市民の独自の発想によるさまざまな活動が活発に展開した。

「Art unit OBI」は2017年の市民プロジェクトとして「月潟アートプロジェクト」を実施したことを起点に活動を開始。また「新潟と会」も同じ年の市民プロジェクトへの参加をきっかけに発足した団体で、「新潟と」の関わりを基軸として毎年異なるテーマによるプロジェクトを行っている。今回の調査対象中、「手部」とともに活動自体がもっとも現代アートの見える「べつのみかたプロジェクト」も、2018年の市民プロジェクト参加をきっかけに発足した。

このほか市民プロジェクトに参加歴のある活動体としては「特定非営利活動法人いわむろや」「ヒッコリースリートラベラーズ」「小須戸コミュニティ協議会特別委員会『薩摩屋企画委員会』」「株式会社T-Base-Life」「手部」がある。

このうち「手部」は市民プロジェクトの母体ともいえるべき「水と土の芸術祭」のアートプロジェクトから生まれた特異な活動体である。2012年の「水と土の芸術祭」で招聘された美術家藤浩志の「部室をつくる」というアートプロジェクトにおいて発足した「部」の一つが、芸術祭終了後も活動体として継続してきたもので、新潟市こども創造センターとの協働やフルマチ・アートスタジオ（*4）を「部室」として使用し活動するなど、やわらかくユニークな活動を行い続けて現在にいたる。

「水と土の芸術祭」との関係さをさらに言えば「タクミクラフト」「bricole」「べつのみかたプロジェクト」の構成メンバーは芸術祭のスタッフとして働いた経験があり、「新潟と会」「Art unit OBI」には芸術祭の市民サポーターとして活動したメンバーがいる。

このように今回の調査対象とした活動体は「水と土の芸術祭」「市民プロジェクト」との関わりが深いものが多い。

以上いくつかの切り口から、今回の調査対象を紹介したが、それぞれの詳しい活動内容は別添資料および、そこに記載された各活動体のホームページを参照していただきたい。

調査方法

今回の調査は対象となった活動体の代表者に、事前にアンケート（別添資料）を送付し、さらに実際にすべての活動体の代表者、または（あるいは、および）構成メンバーと面会し、ヒヤリングをおこなうという方法で実施した。アンケートの質問項目と内容作成にあたってはアーツカウンシル新潟から懇切な助言をいただいた。

質問項目の作成にあたり、前回調査との関連を意識し、「美術」と「アート」の今回のアンケート上における定義を、下のように注記した。

「美術」 絵画（日本画・洋画）・彫刻・版画・写真・工芸・書などのジャンルを総称し、主に団体展・グループ展・個展などの形で発表される視覚・造形表現活動。

「アート」 インスタレーション、映像の多様な活用、環境・場・身体性・プロセス重視、観客参加型などの形態をもち、近年の芸術祭などにおける中心的表現となりつつある視覚・造形表現。

このような定義を行った理由、および動機として、前回調査の回答で「古い美術」「現代アート」と書き分けられたものを、今回異なるカテゴリーとしてあえて明確に、よりシンプルな言葉で仮に定義することで、今回の調査対象とさせていただいた人々の意識や感情と、前回調査で回答をいただいた美術団体や画廊との距離を可視化したいという思いがあった。

また基本的には「古い美術」（「美術」）の中で育まれながら「現代アート」（「アート」）の重要な展開の場ともなってきた「美術館」や「画廊」への関心や関わりをも質問項目に加えることで、既存の美術からはみでながらも、美術的性格をももつ活動をおこなうこれらの人々と、拡張・変貌しつつある美術との関わりの可能性をも探りたいと考えた。

また「調査対象について」に記したように、活動体の多くが「水と土の芸術祭」となんらかの関わりがあったことにも着目し、芸術祭への率直な評価や意見を聞いた。また「美術分野における新潟市内組織基盤の形成」とは市民と美術（意味の拡張した美術）のこれまで以上の、またはこれまでとは違った形でのつながりの形成を意味するのではないかとの考えから、最後に「美術やアートと市民生活は、現在深いつながりを持ち得ていると思いますか」という質問を設定した。

回答結果と考察

回答結果について、1.数値で集計できる(選択回答形式の)項目、2.ヒヤリング項目の順に紹介、考察する。

1.数値で集計できる(選択回答形式の)項目の回答結果と考察

回答結果は別添の表に示した。
以下項目ごとに結果を考察する。

◆「美術」への関心

「とても関心がある」68%。「やや関心がある(質問の選択肢にはなかったが「とても」でもなく「少し」でもないという回答者があったために追加した項目)」「少し関心がある」を加えると86%で、既存の美術へも関心を持つ人がたいへんに多かった。ジャンル別では写真がもっとも多く(16)、洋画、日本画、工芸が各14、ついで版画(11)、彫刻(10)で大きな偏りはなかった。

◆「アート」への関心

「とても関心がある」が同じ68%。「少し関心がある」を加えると91%で「美術」とほぼ同じ程度(あるいはそれ以上)に関心が高かった。

今回の回答者は「美術」「アート」に、ともに関心を持つ人が多かった。これらの活動体と「水と土の芸術祭」など「アート」の関わりの大きさから「美術」には距離を感じ、「アート」に親近感を感じているのではないかという漠然とした予測を、(筆者は個人的に)抱いていたが、回答結果はこの予測を裏切り、「美術」への関心も「アート」への関心も同じくらい高かった。このことは「美術分野における新潟市内組織基盤の形成と新たな可能性」を考える場合、参考になるだろう。

ジャンル別には写真への関心が高かったが、これは写真が「アート」において、他のジャンル(絵画や彫刻など)以上に大きな関わりを持つようになっていることと、若干の関係があるかもしれないと考える。

◆美術館に行く頻度

よく行く(月に一回以上)45%。ときどき行く(2~3カ月に一回程度)38%、たまに行く(年に1回程度)18%。

美術館は半数近くの回答者が毎月訪れる場所となっている。後述の画廊に行く程度と比較しても高く、「美術館」での体験がこれらの活動体の「美術的」性格に少なからず寄与していることがうかがえる。

訪れる美術館としては市内では新潟市美術館(17)、万代島美術館(12)、砂丘館(9)、新潟市新津美術館(8)、北区郷土博物館(3)、北方文化博物館(3)、各区の民俗資料館(2)、石油の里・中野家(2)、NSG美術館(1)という結果であった。

市外、県外の美術館では都内の美術館(東京国立博物館、東京国立西洋美術館、東京国立近代美術館、同工芸館、国立新美術館、国立科学博物館、東京都美術館、東京都写真美術館、東京都庭園美術館、2121 DESIGN SITE、森美術館、インターメディアテク、東京ステーションギャラリーなど)が圧倒的に多く、新幹線で日帰り可能な東京の美術館が、活動体の構成員たちの大きな刺激のみならずとなっているらしいことが想像できた。

なお美術館へ行く目的としては「展覧会(企画展)」を挙げた回答が多く、明確な目的意識を持って美術館に足を運んでいることがわかった。

◆画廊・ギャラリーに行く頻度

よく行く(月に一回以上)27%、ときどき行く(2~3カ月に一回程度)27%、たまに行く(年に1~2回程度)27%、ほとんど行かない(数年一回程度)14%で、行かないという回答も1名あった。

美術館と比較して、回答者たちが画廊・ギャラリーには距離を感じていることがこれらの数字からも伺える。とはいえ、年に数回以上は訪れるという回答が半数以上あり、画廊・ギャラリーが、回答者たちにとって決して縁遠い場所でもないという事実も確認できた。

ヒヤリングによる「画廊にあまり行かない理由」としてはSNSによる情報不足、展覧会の会期の短さ、「敷居が高い」「内輪の感じで入りづらい」「現代アートが少ない」などがあった。

訪れる画廊・ギャラリーとして、市内では新潟絵屋(11)、羊画廊(4)、ギャラリーろば屋(4)、蔵織(3)、kaede Gallery + full moon(3)、BOOKS f3(2)、ギャラリー浜つばき(2)などが挙げられた。

市外では、美術館同様に東京都内の画廊・ギャラリーが多かったが、県内では游文舎、ギャラリー湯山、ギャラリーみつけ、グルグルハウス高柳、maison deたびのそら屋、ギャラリーmu-an(2017年に閉廊)などの名前が挙げられた。行く目的としては、美術館と同じく「展覧会」がもっとも多かった。

◆美術作品の購入経験の有無

購入経験のある回答者は86%。購入した作品のジャンルは絵画がもっとも多く(11)、工芸と現代アート(各7)、ついで彫刻、版画、写真(各4)。

購入した作品は「身近に飾って楽しむ」(購入経験者の68%)がもっとも多く、購入した美術品が生活のなかで楽しんでいる情景が想像できた。購入した場所は画廊・ギャラリーが多かった(16)が、作家からという回答も8名あり、美術家との交流経験が回答者に比較的多いことがうかがえた。

以上の回答から、今回回答をしてくださった方々にとって、画廊・ギャラリーとの関係は、密接とは言えないまでも、それなりにあり、また「購入」によって生活のなかに美術を置いて楽しむ経験も少なからず積まれていることが確認できた。

◆美術団体との交流

この項目では構成員個人ではなく、活動体としての「美術団体」との関わりの経験を質問した。回答は「ある」が9、「ない」が6でほぼ半々であった。

関わった美術団体としては新潟絵屋(3)、水と土の芸術祭実行委員会や市民プロジェクトのグループ(3)などが複数回答で、ほか武蔵野美術大学、地域のアマチュア写真サークル、NPO法人アートキャンプ新潟、岩室あなぐま芸術祭実行委員会、新潟県伝統的工芸品組合・産地組合、新潟・市民映画館シネ・ウインド、アートキャンプにいがた、NASC(新潟県アールブリュット・サポートセンター)があった。

ほか、高齢化と後継者不足を課題として抱える(ことが前回調査で確認できた)新潟市の美術団体のあり方については、回答者個人にヒヤリングで意見をうかがった(後述)。

◆水と土の芸術祭について

関心がある64%。少し関心がある32%と関心の高さが確認できた。

「調査対象について」でも紹介したように今回の回答を寄せていただいた活動体とその構成員には芸術祭のスタッフ、サポーター経験者や、市民プロジェクトの参加経験者が少なからずあり、「関心がある」という回答がもっとも多いことを予測していたので、「少し関心がある」と幾分距離を置いた関心の示し方が3割ほどあったことに意外な印象を受けた。

ヒヤリングの回答(後述)でも語られているように、今回の回答者には、芸術祭との関わりの深さから、また他地域の多くの芸術祭を実見している体験などから、評価と同じくらの批判意見があり、その批判はおそらく各活動体の活動姿勢や独自性とも連関している。その結果がこのような数字となって現れたということかもしれない。

◆「水と土の芸術祭」以外で訪れたことのある、あるいは関心のある芸術祭

県内に関しては「越後妻有大地の芸術祭」(18)が圧倒的に多かった。ほか「さどの島銀河芸術祭」(6)、「ヤングアート長岡」(4)が挙げられた。

県外は複数回答のものだけで、「中之条ビエンナーレ」(8・群馬県)、「北アルプス国際芸術祭」(8・長野県)、「瀬戸内国際芸術祭」(8・香川県)、「横浜トリエンナーレ」(7・神奈川県)、「みちのおくの芸術祭山形ビエンナーレ」(7・山形県)、「愛知トリエンナーレ」(7・愛知県)、「六甲ミーツ・アート」(4・兵庫県)、「奥能登国際芸術祭」(4・石川県)、「札幌国際芸術祭」(3・北海道)、「さいたまトリエンナーレ」(3・埼玉県)、「リボンアート・フェスティバル」(3・宮城県)、「混浴温泉世界」(3・大分県)などが挙げられた。

ほか、「奈良・町家の芸術祭はならあと」(奈良県)、「いちはらアート×ミックス」(千葉県)、「TRANCE ARTS TOKYO」(東京都)、「六本木アートナイト」(同)、「東京デザイナーズウィーク」(同)、「金沢文庫芸術祭」(神奈川県)、「信濃の国原始感覚美術祭」(長野県)、「BIWAKOビエンナーレ」(滋賀県)、「京都国際現代芸術祭」(京都府)、「つまづく石の縁」(群馬県)、「百五〇年の孤独」(福島県)、「茨城県北芸術祭」(茨城県)、「伊豆高原アートフェスティバル」(静岡県)など。

国外は「ヴェネツィアビエンナーレ」(3・イタリア)、「ドクメンタ」(2・ドイツ)ほか「ミラノサローネ」(イタリア)、「台湾桃園藝術節」(台湾)、「台北ビエンナーレ」(同)、「光州ビエンナーレ」(韓国)。

以上、特に日本国内の芸術祭については、筆者も初めて耳にするものも含め多くの名が挙げられ、開催地域も北海道から九州まで及ぶことに驚きを覚えた。ただ、複数回答数の分布を見ると、回答者の7割にあたる16人は0~4の芸術祭名を挙げたのとどまっており、回答者全体が多数の芸術祭を訪問、あるいは関心を向けているとまでは言えない。それでも、このような全国的な規模での「芸術祭」

の盛行が、「はじめに」に記した「美術の意味拡張」を引き起こす大きな力となっていることは疑いがなく、また回答者たちが実際に訪れる、または関心を向けるという形で、これらの数々の芸術祭から刺激や影響を受けていることが想像された。

◆美術・アートと市民生活とのつながり

「深いつながりを持ち得ていると思う」23%と「どちらとも言えない」9%の合計を「深いつながりを持ち得ていると思わない」50%が上回った。この結果は「美術分野における新潟市内組織基盤の形成と新たな可能性」を表題に掲げた本調査の動機とも連関する。

ただ設問の「市民」を、市民一般と受け取っての回答もあったと思われ、設問自体にあいまいさがあったと反省するが(設問自体に疑問を感じるという回答も1名からあった)、ヒヤリングにおいては多くの興味深い意見が語られた(後述)。

2.ヒヤリング項目の回答と考察

今回の調査では選択式の質問と関連し、対面によるヒヤリングでの回答もいただいた。ヒヤリングは場合によって長時間におよび、内容と示唆に富んだ意見を多数伺うことができた。聞き手からの発言は最小限にとどめ、特定の方向に誘導することのないよう配慮をもってヒヤリングをおこなった。回答の一覧は別添資料に紹介した。ここでは語られた意見相互の関係性も考慮しながら、考察を加えつつ紹介する。

◆「美術」に関心がない理由

「美術」について、少数(14%)ではあるが「あまり関心がない」という回答があった。

その理由を聞いたところa「カテゴリー(美術として括り概念化してとらえること、という意味か)に興味がない、美術と括られているもの以外のところから、美術を掘り起こす方に興味がある」、b「身近に美術に触れる環境で育っていないため…縁がない。知り合った作家の作品を見に行くことはあるが、主体的に行く習慣がない」、c「別のことへの興味が最優先なので関心を向ける余裕がない」などの回答が得られた。

aはジャンル(洋画・日本画・彫刻・工芸・書など)の機械的接合体としての既存の美術への違和感という意味に個人的には受け止めた。既存のジャンル(形による分類)の物差しを外すところから掘り起こされる「美術」(感性を動かすもの)があらわれるという思想は、「はじめに」に書いた多様な形で進行しつつある美術の意味拡張ともつながるものだろう。bは育った環境が関心の程度を習慣的に規定するということだが、語った本人が現在「アート」と独自の関わりを持つ活動を続けているという事実が、筆者には非常に興味深かった。これもまた美術の意味拡張という現象について考えさせる回答と言える。cの回答者も、事実としてきわめてアートの活動を行っている。美術に「関心を向ける余裕がない」人が、場合によって、他者から見て非常に美術(アート)的だという興味深い現象の一例である。

◆「アート」のどのようなところに関心があるか

設問は、今回の調査対象とした活動体と「アート」の強い関わりを想定し設定したが、想定とは異なり、回答者の多くが「美術」にも関心を抱いていることがわかった。「『美術』のどのようなところに関心があるか」という質問もおこなうべきであったと反省している。

別添資料のように、内容に富んだ多くの回答が得られた。矛盾するようだが、そのことにより、一方で筆者の予想の正しさが裏付けられたようにも感じる。

回答のすべてを要約して紹介することは困難だが、若干の整理をしつつ紹介と考察を試みる。

新しい視点をくれる/知的好奇心をくすぐる/幅(がある)/その場所の環境に応じて行われる…空間表現/作っていく過程が見える/参加できる/境界を越えていく力/時代の変化(を感じさせる)/効率一辺倒で本当にいいの?という問いを投げかけたり、単純に表現できないような、もやっとした感情をどうにかできる/意識を飛ばしてくれ…現実から離れてみたいという気持ちを満たして(くれる)/営利を目的とせず発生しているものに、目を向けさせる力/土地・地域のを吸い上げながら(おこなわれる表現)/意味のなさ、理解できない部分…(に)興味がある

回答からピックアップした「アート」の魅力語る言葉の数々だ。

このように多様な表現で語られた「アート」の魅力は、具体的には、おそらく美術館や画廊・ギャラリーでの体験以上に、「水と土の芸術祭」や回答者たちが多数の名前を挙げた各地の「芸術祭」における表現の印象、感想から生じていると想像される。

そう想像するひとつの理由が、これらの「アート」の魅力語る回答に、「美術」との対比で語られたものがいくつもあったことである。例えば「『美術』はそれぞれの分野でかっちりとした体系を持っているが「アート」には(体系から自由な)「幅がある」、美術展は完成されたものと感じられるが、アートは「過程が見え、参加できるものもある、「従来の、ある種かたまっている美術とはまた違う面白さ

がある」など。これらは美術館や画廊の壁や床に、額縁に入れられたり台座に置かれるなどして展示される展覧会の形式からより離れた表現に触れての対比であり、感想だろう。一方で「アート」が与えるものと「同じような気付きは『美術』からも得られるが」と語る感想があったことも興味深い。

回答者たちが語った「アート」の魅力や、回答者の言葉を借り、かつ筆者なりに言葉を補いつつ、若干の分類整理をしてみると

- a アーティストの新鮮な視点、ものの見方、時代感覚に触れ「思いがけない瞬間(驚き)」を体験することで、固定観念が揺さぶられ、自分の生活までが変容する魅力
- b 作品それ自体に加え、作品が提示される「空間や時間の表現」の魅力
- c 既存の境界線(固定化した概念やものの見方)を越境し、そのことで「美術」の幅を拡張し、また「付加価値を与える手法、橋渡し役」などの力をもつことで美術以外の活動(例えばコミュニティデザインやソーシャルデザイン、地域的な課題との取り組みなど)と関係が生まれ、見出されたりする魅力

となる。

これらすべてが「美術」になく、「アート」だけがもつ魅力と断言することは「美術」に長く親しんできた筆者としてはためらいがある。しかし、一般的にはこれらが今日の「アート」の表現からより強く、より生き生きと感じられるものとなっていることは確かであり、回答の多くもその事実を語っているように思われる。

◆今後の新潟市の美術団体のあり方について

この設問に対しても多くの意見が語られた。

すべての回答者が、既存の美術団体とは無縁の立場であり、かつその活動の美術的な性格から、既存の美術団体についてまったく無関心でもないという視点からの意見は、きわめて厳しくもあり、また率直でもあった。今後の「美術分野における新潟市内組織基盤の形成と新たな可能性」が、既存の美術団体と異なる世代や傾向の活動との新たな関係性の構築という課題と向き合うことでもあるだろうと予想するとき、これらの意見には多くの重要な示唆が含まれていると感じる。

回答が語った美術団体の「外からみた問題点」を列挙する。

- a 情報が少ない。情報開示の方法が古い(紙媒体のみに依存しウェブやSNSの活用が足りない)。
- b 「声の大きい」高齢者の存在が敷居を高くし、間口をせばめている。
- c 団体、組織の息苦しさ。カテゴリー(ジャンル)のみで考え、動く窮屈さ。
- d 自分たちのみの価値観に固執し、「アート」へ関心を向けないかたくなさや団体のカラーで個人を染めようとする傾向。

こうした指摘が、新潟市のすべての美術団体に正しくあてはまるかどうかは別としても、比較的若い世代の、美術やアートに少なからぬ関心をもつ人々の目に、既存の美術団体がそのようなイメージで少なからず映っているという事実は、美術団体側がもっと意識していいことではないだろうか。

厳しい意見が語られた一方で、「若い人たちが入れる環境」を期待したり、関心ある人々と「直接会話ができる機会」を積極的に持つてはどうか、ウェブを活用して情報を発信したり「若い人達のグループとプロジェクトとして合流する」方向を模索しては…、などの建設的な提言も語られた。また「周りには(美術の団体に)入りたいと思う人はたくさんいる」ので、もっと間口を広げ、関わりたい人を柔軟に受け入れる方向への、美術団体の変化を期待する声もあった。

◆「水と土の芸術祭」への関心と評価

「調査対象について」で紹介したように、今回の調査対象となった活動体やその構成メンバーの多くは、2009、2012、2015、2018年の4回にわたって新潟市で開催された「水と土の芸術祭」になんらかの形で直接関わった体験をもつ。また「『水と土の芸術祭』以外で訪れたことのある、あるいは関心のある芸術祭」を尋ねた設問への回答でも明らかになったように、各地で開催される芸術祭への熱い関心を向けている。

この設問に対しても非常に多くの多様な意見が語られた。

整理しつつ以下に紹介する。

1 評価する意見

- ・ 2009年、2012年はとても好きだったし、良いと思えた。
- ・ 2012年で初めて仕事として関わり、たいへんではあるが、関わる意義があると感じた。振り返るとこの年が一番チャレンジしていた

回だった。

- ・2012年がとてもよかった。岩室や大かまぼこの展示が記憶に残り、イベントも興味のあるものが多かった。
- ・芸術祭そのものの内容については、2012年以上のものは以降出てこなかった(2012年への評価)。
- ・アート作品は、水と土の芸術祭2012の質はいいと思ったが、それ以降は、興味を持たずにきた(2012年への評価)。
- ・2018年のアートプロジェクトは、2015年と比較すると2018年は市内でコンパクトに回れる点で大きな進歩があり、見やすかった。安全面やアクセスの仕方も向上した。
- ・2018年の最終日にNEXT21のアトリウムで開催していた紙相撲は、参加型のイベントで非常に面白かった。
- ・2018年でのショップ運営は、これまでの経験から、やり方をさらに改善し、職場としては最も手応えがあった。
- ・芸術祭にかかわった新潟市の職員が、異動後も前例踏襲主義から外れ、新たな試みにも積極的に向き合ってくれた。
- ・行政の方が一生懸命取り組まれていた。
- ・芸術祭でいろんな人と知り合えたことは、経験としては非常に大きい。
- ・市民プロジェクトは、アートの枠ではない活動をしている人たちを吸い上げる役割を果たしていた。無名の市民の活動が見えるようになったことに価値がある。
- ・市民プロジェクトは、素人である市民が主体となり構築するものであり、時間とお金が必要ではあるが、仕組み自体は賛成。
- ・芸術祭をきっかけに新潟を知ろうと考える人たちが増えたのは良かった。

語られた言葉の中では「評価する意見」は量としては少なかった。そのなかに2012年の芸術祭の特にアートプロジェクトの質を評価する意見が多くあったことは注目される。市民プロジェクトを評価する声や、また2018年はアクセスやショップ運営などで「改善」があったという意見もあった。

2 批判(批評的)意見

実に多くの意見があった。内容で分類し、要約して紹介する。

a コンセプト・内容について

- ・内容は、2012年以上のものは以降出てこなかった。市の思惑、観光とか別のものに使われているだけ。
- ・主催者側の意図や考えがなんなのかわからないままだった。
- ・芸術祭のブランディングという大事な部分が、毎回動いていた。都市型の芸術祭として、もっと磨き上げができればよかった。
- ・毎回変わりすぎ、一貫性がない。特に2015年以降は市民に媚びていた。
- ・(2015年以降の芸術祭について)市民に開かれた内容にすればわかりやすくはなるが、歩み寄りがすぎて、本来のアートの魅力が薄れた。
- ・2009年は哲学だけがあり、「大地の芸術祭」を真似ただけで、スケールが小さく、ハードが弱くてショートしている印象。…2015年は、2018年は守りに入り、政治・行政が入りすぎた。
- ・回数を重ねた蓄積が感じられず、毎回リセットし、どんどん「やりやすい」、色の薄い方向へ流れていった。
- ・2009年は北川流、その後都市型にスライドし、あれもこれもやると言っていたのが、最後は市民プロジェクトがメインとなっていった。市民文化祭的においが、回を重ねるごとに増していった。
- ・毎回軸がブレる。参加する側としても、どう自分の軸足を置いていいのかわからない。また、切実な課題やそれに対する鋭い意識が感じられない。
- ・2018年は印象に残っていない。家族で見に行ったが、一般的レベルでお勧めできるかというとなげしい。作品のクオリティーとボリュームに不満あり。
- ・芸術祭を通して、新潟市が何をしたいのか、どういう目的や理念があるのかわからない。

b 市民プロジェクトについて

- ・公式に記録をするというところが抜け落ちている。外からの評価を仰ぐためにも、公式に内容を記録すべきである。芸術祭が何に向かっているのか、だんだんよくわからなくなってきた。
- ・2015年までの間に、市民プロジェクトへの注目が大きくなっていったが、骨子案にアートプロジェクトとの連携といった記述があったのにいつの間にかそれがなくなり、2018年は市民プロジェクト、こどもプロジェクト、アートプロジェクトの3つに切り離されてしまった。地域拠点プロジェクトは市民プロジェクトとアートプロジェクトの融合でできているはずなのに、2つを分断してしまうとそもそもその目的から離れてしまう。
- ・イベントが多くなりすぎて全体として何をやっているのかわかりにくくなった。
- ・知り合い同士のうちうちの動きになってしまい広がりを感じられなかった。

- ・提案に対してなぜ採択されたかが公開されず理由がわからない。内容や活動が評価をされるわけでもない。事務的な印象。
- ・文化祭的に開催するならよいが、芸術祭とくっつけたことで、税金の無駄使いと言われる。やり方が不器用。
- ・新潟市の切実な課題を解決する方法を市民プロジェクトとするならば、もっと主催者側はサポート（関心をもって対応）してほしい。申請書に書かれた内容でしか判断せず、組織内外の横のつながりもない（少ない）。評価も主催者の報告書任せ。“何でもできる”人が現れてくるのを待っているような印象で、人を育てていくという姿勢は感じられなかった。
- ・2018年には、突然「市民プロジェクト」が前面に打ち出されて、「あなたが主役！」と言われた。課題解決の方法が市民プロジェクトだったのかもしれないが、そうだとすれば予算や展開方法についての考え方が、今までと何が違うのか、明確には見えてこなかった。
- ・市民プロジェクトの補助金が5分の4になってしまったのは不満。市民が主役と言いながら、主役になっていなかった。地域拠点プロジェクトもうまく機能できなかった。本当は各拠点でそれぞれの情報が得られるようにしたかったのだが、他団体との情報共有や関係性がうまく作れなかった。

c 運営方法・組織について

- ・主体である行政が縦割りにしすぎて、部や課をもっと横断しながら進めれば、もっといろんなことが展開できたのではないか。
- ・関係者たちだけで盛り上がっていて、そうではない市民との意識のギャップが大きい。そのことに気がついていない、もしくは重要視していないように思える。
- ・大学として協力をしたが、丸投げして終わりという印象だった。
- ・「芸術祭」全体の枠組みに組織が見合っていない。労力（スタッフ数）・資金・準備期間等の見通しが甘すぎる。スタッフが自分の仕事をこなすことで精一杯。
- ・来訪者に対するウェルカム感がなかった。
- ・運営上の改善点など、なかなか次に引き継がれなかったり、やり方を少し変えたらもっとよくなったのに、もったいない。

d 広報について

- ・単発のイベントだと検索しても出てこない、引っかかってこないものがある。一般の人が、SNSやチラシなど手軽に情報を得て、興味を持ってふらっと行けるようなものでなければ何のための芸術祭なのだろう。
- ・全体として広報の仕方に課題が多いと感じる。タイミングが遅く、うまく伝わりきれなかった。市民がどこで情報を得るのか、リサーチが必要だと思う。

e 市民との関係について

- ・関係者たちだけで盛り上がっていて、そうではない市民との意識のギャップが大きいと感じる。
- ・2015年以降、市民を中核に置くといいながら広報やフォローができていなかった。市民の活動をすくい上げる仕組みをもっとしっかりと、フォローアップをして欲しかった。
- ・みずつちと篠田市長の評価がイコールになっていて、文句を言う標的になっているように感じた。政治に強い興味を持っているご高齢の方にアンチが多い。
- ・市民が主役と言っても、結果的には「一部の市民が主役」になってしまって、それ以外の市民はそもそも情報を知らなかったり、関わり方がわからなかったり、冷めた目で見ている状況になっていた。
- ・芸術祭が市民に認知されておらず、何をやっているかわからないため、税金の無駄遣いという批判を受けた。

以上のように、芸術祭と実際に関わりをもち、また他地域の芸術祭への関心も深い人たちならでは具体的な詳細な批評・批判をうかがうことができた。多様な意見にも、少なからず重なる部分もあり、そのような点に特に注目し、ここに指摘された問題点のおおまかな輪郭を粗描すると下記ようになる。

内容・コンセプト

コンセプトが毎回大きく変わりすぎ、主催者（新潟市）の意図が4回全体を通じてはあいまいなものになってしまった。第3回（2015年）以降は「わかりやすさ」を意識しすぎ、芸術祭としての内容も薄まった。

市民プロジェクト

後半になるほど「市民プロジェクト」が前面に押し出される形になったが、主催者側（新潟市・実行委員会）の内容への関心が感じられず、サポートもなかった。プロジェクトの数だけが多く、広報も不十分だったため、「内輪だけ」のイベントと見られてしまった。アートプロジェクトとの連携も不十分で、公式の記録も内容をしっかり伝えるものになっていない。

運営方法・組織

行政の横の連絡が不足。スタッフも、催しの規模に比して人数不足だったため、与えられた仕事で手一杯だった。回を重ねても運営上の改善点の申し送り、検討が十分に行われていなかった。

広報

一般の人に情報が届いていたと言えず、手法、タイミングにも問題が多く、改善の余地があった。

市民との関係

関係した市民とそれ以外の市民の溝が大きかった。芸術祭と篠田市長のイメージが重なり、市長批判がそのまま芸術祭の批判になっていた。参加した市民へのフォローも手薄だった。

3 否定的意見

ほか「水と土の芸術祭」自体をまったく評価しない意見(下記)もあった。

・評価はしない。第1回の責任を誰もとっていないのに、まだそんなことをしているのか、と感じている。そもそも芸術祭は行政主導でやるべきものではない。自発的に活動をする個人がまずあって、財団や行政はそこに対して助成をおこなうのが本来あるべきだ。…先に金ありきという考え方はふさわしくない。

民間(個人の活動)への支援を行われていない一方で、民間に比べ大規模の文化事業を行政がおこなうことへの違和感の表明である。

◆美術やアートと市民生活のつながり

最後の設問は「調査方法」でも記したように、本調査の表題との関連で設定した。漠然とした設問であり「設問自体に疑問を感じる」という回答もあったが、多くの回答者からは示唆に富んだ多彩な意見をいただくことができた。

なお「市民」という語に関しては、設問の「新潟の市民」という意味を広げ「一般の日本人」と解釈しての回答もあった。

「美術やアートと市民生活のつながり」は「ない」とする回答が半数だったが、一方「ある」と答えた人が3割近くいた。以下はその理由。

- ・芸術祭が開催された場所で、「ああ、また芸術祭ね」という言葉が出ること自体、つながりがある証拠と言える。
- ・生活の中に取り入れる要素としては、つながりはある。
- ・人が人生において培ってきた手法や道具を専門的に突き詰めていったのが美術であるならば、美術は普通の生活につながるものであり、その美術は市民生活と密接なつながりを持ち得ている。
- ・周囲を見ていると、みなさん多趣味で余暇活動を満喫している。総合的な表現活動に関心を持つ人は多い。ただ(括弧つきの)「美術」や「アート」となると途端に距離を感じる人が多い。しかし作者との関係性が生まれると興味も生まれる。
- ・「水と土の芸術祭」と「市民プロジェクト」に関わる人たちは、美術・アートに関心が高い人が多かった。ただ自分の職場の人を見ると、関心がない人が多い。
- ・生活者の活動＝アートであると考え、自身の中からでてきたものを表現する、その行為自体がアートであり、そのアートは生活と切り離すことはできない。

つながりが「ない」と回答した半数の回答者には「今後新潟市において、より美術やアートと市民生活が関わりを深めていくために必要なこと」を聞いた。回答(の要約)は以下。

- ・小さいころからもっと美術やアートに触れる機会が増えるといい。「美術」や「アート」は実は幅が広いのに、教える側がそれを限定し、ハードルを上げている。
- ・裾野を広げる活動が必要。最初のきっかけがつかめれば、皆自分の好きなものを掘っていくはず。気軽に作品を見たり買えたりする場や作品を発表する場があった方がいい。
- ・きっかけをどう作るかが課題。食文化を入り口にするなど、角度を変えた工夫が必要で、工夫をしながら続けていくしかない。
- ・様々な団体の活動をクールに分析し、ネガティブな意見をも洗い出し、失敗体験を次に活かせるよう取り組んでほしい。
- ・地域にもともとある文化を美術につなげていけば、入りやすい入り口になる。作るプロセスも大事。
- ・ギャラリーをめぐることを観光目的のひとつとするなど、一般の人にわかりやすくする取り組みを行って欲しい。料理とアートなど、関心を持たせるきっかけづくりが必要。

- ・作家と出会う機会が少ないので、レジデンスなどは手段のひとつとしてよい。アートのワークショップも増えたらよい。まちづくり、まちあるぎに関心を持つ人と、アートへの関心が融合していけたらいい。空き家や空き店舗を活用し、まちなかのアートイベントを新潟で開催できないか。
- ・アートはビジネスとなり、一般に浸透している。パソコンとインターネットの一般化でアートは特別なものではなくなった。そういう意味では生活に馴染んでいる。大地の芸術祭は、「旅行+好きなもの+時間つぶし+体験+地域文化」、フジロックフェスティバルは「音楽+旅行+ファッション+自然+体験+仲間」。時代を理解し、編集がうまく、発信も含め「非日常をアートで楽しむ」ものとなり、わかりやすい。一方ギャラリーや美術館は武器が足りなすぎる。朱鷺のように保護され残るシステムが必要なのかも。
- ・岡本太郎が危惧した「アートは特別だという敷居」は50年経っても変わらない。その他のエンターテインメントが充実していることもあり、市民生活と関わりを深めることはできないと思う。
- ・「アート」というものを身近(生活圏内)に提示し続けることで、そういうものを好む人(受け入れられる人)を少しずつ増やすことはできる。
- ・美術館に用がないと決めている人は、すでに美術館に行くという選択肢がない。ただ、アニメや漫画関連の展覧会は盛況で、美術館に足を運ぶきっかけとなっている。その場所に足を運ぶ、ということに意味があるのではないか。一度足を運ぶと、先に可能性がある。
- ・美術がくありがたいもの>になってしまい、限られた人しか関わることができなくなった。
- ・点で存在しているものを、アートで結びつけることが大事。新潟の文化は、市民生活と関わりが深い。例えば仏壇技術を応用した金箔を使ったネイルアートや、伝統工芸とは趣を変えた漆器体験など、伝統文化とアートを結びつける取り組みも必要。
- ・親世代は美術への関心が低くなく、古い画廊も残っている。しかしその世代と若い層が乖離している。両者をつなぐことが重要。
- ・世界的評価を得ているような有名作家の展覧会は行っても、無名の人々の展覧会には行かない人が多い。入り口をどう作っていくか、きっかけづくりが必要。学校教育が大事。新潟の文化度は高く、他県の芸術祭担当者から評価も得ている。美術やアートは大事なもので、「芸術祭」はなくして欲しくない。
- ・新潟市は(陶器のように)普段使いをするものに対して文化性(関心)が低い。飲食店でも食器に気を使っていない店が多い。
- ・イタリアでは暮らしがアートと深いつながりがあると感じた。夕食後にウインドウショッピングだけのために出かけたり、店も夜のショーウインドウを楽しんでもらうためにディスプレイし明かりをつけている。誰もいないのに無駄と思うかもしれないが、そこにお金を使う文化があった。
- ・子どもの頃、身近に何があるかで違ってくると思う。成長する中で自然と熟成されるものがあるはず。

以上のように内容は多様だが、「重なる意見」を要約すれば下記の3点となるだろう。

- ・幼児期からの体験の重要性
- ・わかりやすく、近づきやすい「きっかけ」や「入り口」づくりの工夫
- ・多様な文化(食、旅、まちづくり、生活・伝統文化)とのつながりの創造

おわりに

多岐にわたる質問に対する15の活動体の22名の方々の回答を紹介し、考察した。

結果をまとめると下記ようになる。

- ・「美術」と「アート」に対する関心としては、「美術」への関心を「アート」へのそれが上回ったが、「美術」への関心も高かった。「美術」になく「アート」にある魅力として「新鮮な視点」「空間や時間の表現」「境界線を越えて多様な世界との関係を生み出す力」などが挙げられた。
- ・美術館は多くの回答者が訪れる場所であり、新潟のほかは首都圏の美術館をよく訪れている。
- ・画廊・ギャラリーへも美術館へほどではないが、訪れる人が多かった、美術作品を購入した経験のある人も9割近くあり、購入した作品は生活のなかで楽しんでいる人が多い。
- ・美術団体との交流は半数の活動体が経験を持つ。美術団体への関心を抱く一方、「情報開示の少なさ、開示方法の古さ」「敷居の高さ」「アートへ関心を向けないかたくなさや団体のカラーで個人を染めようとする傾向」などが挙げられた。
- ・「芸術祭」への関心も高く、回答者の多くが日本各地の芸術祭に関心を向けていた。新潟市の「水と土の芸術祭」に対しては意義を評価する意見のある一方、「コンセプトに一貫性がなかった」「分かりやすさへの傾斜の疑問」「市民プロジェクトの主催者の関わりの薄さ、数が多すぎた、記録が不十分だった」「運営に横の連携が足りず、スタッフ数も不足で、経験が受け継がれなかった」「広報に

問題があった」「市長批判が芸術祭批判に重なっていた」などの意見があった。芸術祭自体への否定的意見もあった。

・「美術・アートと市民生活のつながり」については半数の回答者が「ない」と答え、今後の試みとして「幼児期から美術・アートを体験する機会をつくる」「近づきやすいきっかけや入り口づくりの工夫」「多様な文化(食、旅、まちづくり、生活・伝統文化)とのつながりの創造」などの提言があった。

前回調査と今回の調査結果を、今後は新潟市の「美術」や「アート」の関係者や、程度は問わず、それらになんらかの関心を向け、抱く人々と共有し、さらに必要な調査やヒアリングも重ねつつ、今後に向けて率直な意見交換をおこなえればと考えている。

最後に前回調査と今回の調査にご回答いただいたみなさまに感謝申し上げます。

(考察執筆/大倉 宏)

(調査実施・とりまとめ/上田浩子・岡部安曇)

(ヒアリング/大倉 宏・上田浩子・岡部安曇)

注

* 1「いわむろや」は新潟市西蒲区にある観光施設の名称であり、指定管理者としてそこを運営する団体の名称でもある。

* 2新潟・三条仏壇と現代アートのグループ「目(め)」のコラボレーションによる「空壇」(くうだん)は、平安時代の崖にかけられるように作られた観音堂にヒントを得、中空に浮かぶように作られた仏壇である。

* 3「市民プロジェクト」への助成は2016年より80%になった。また2018年の市民プロジェクトは、芸術祭実行委員会との「共催」事業という形になった。

* 4「フルマチ・アートスタジオ」は新潟市文化政策課の事業として2014年に開設された、中央区の古町通の「空き店舗を活用しアート活動を通じてまちの活性化につなげるアート・コミュニティスペース」。2017年にクローズした。

調査協力団体

Art unit OBI

〒950-1304 新潟市南区月潟1555 TEL.090-7436-4034
artunit.ob@gmail.com <https://www.facebook.com/artunit.ob/>

設立年／2017年 構成員の数／2名 代表者名／本間智美、鈴木泰人 回答担当者／本間智美、鈴木泰人

活動の目的・趣旨

美術作家と建築家の二人のユニット。場や仕組みづくりとしての表層部分を建築家が担当し、心に問いかける深層部分を美術家が担当することで、社会課題解決に取り組むなど、今までにない美術のあり方を提示する。

活動内容

2018年の水と土の芸術祭を見据えて、2017年より「月潟アートプロジェクト」を展開。会話を通して地域の方から得た情報(忘れ去られていた映画館の存在など)から作品を生み出し、作品を通してまた会話を生み出す、というサイクルの中で、その地域特有の物語を紡ぎだしている。また会話を軸にすることで、プロジェクトを通して関わる人が増え、持続可能な活動に繋がっている。ユニット名OBIの由来は、たて糸とよこ糸で構成されている布のように、社会において分野を横断しながら、その地域ならではの物語が出来上がったとき、特有の帯をつけて地域に渡したいという思いからつけた。県外・海外のプロジェクトにも多数参加。ユニット設立のきっかけは、2015年から「水と土の芸術祭」の市民プロジェクトに参加していた本間さんが、すでに新潟県内でさまざまな美術活動を展開してきていた鈴木さんに出会ったことから。芸術祭において作品が展示されて終わりではなく、作品があったことで浮かび上がった思いや課題を次の展開に繋ぎたいと考えていた本間さんが、2017年南区での市民プロジェクトへの参加を鈴木さんに打診。建築家と美術家が協働することで、互いの活動の意味が深まることからユニットを組み、法人化(合同会社)をした。

株式会社T-Base-Life

〒950-0077 新潟市中央区天明町7-10 TEL.070-4326-0764
tbaselife@gmail.com <http://www.tbase.co.jp> <https://www.facebook.com/TBase.Tenmeicho/>

設立年／2017年9月に法人化 構成員の数／1名

代表者名／天本浩未(代表取締役社長) 回答担当者／天本浩未、関谷浩史

活動の目的・趣旨

空家の増加が地域課題となっている天明町で、商業的な「空家の活用」を行うことによって、地域に人を呼び込む取り組みをおこなっている。空家、空地などの「資源」にアートやデザインなどを取り入れながら新しい価値を与え、地域に人を呼び込むハブとして活用していきたい。現在はそのプロトタイプを作るため、様々な方法にトライしている。

活動内容

地域が潤うために、地域にあったサービスは何かを模索しながら取り組みをおこなっている。改装した住宅は家具を可動式にし、様々な用途に活用できるように工夫した。公園などを会場とした地域密着のフリーマーケット「天明マルシェ」を毎年開催。カフェ企画、拠点を持たないアーティストの企画展、音楽、香り、写真、セラピストによる施術体験をオーバーラップさせたエネルギーチャージイベントなどを開催。2018年には「天明町エリアリノベーション研究会」を発足。空店舗と空家の調査を行い、不動産オーナーと地域住民を対象にしたセミナーを開催し、空店舗・空家をめぐるとツアーも実施。ゲストからどういう場所に魅力を感じるか意見を求め、地域の魅力発見マップを作成した。ワークショップでは福岡の津屋崎からゲストを招き、対話の方法について語り合った。子どもたちを対象にプログラミング教室もおこなっている。今後は三条の企業とコラボし開催していく計画もある。また、自律型の組織体制「Teal組織」をめざし、様々な分野の専門家と連携する「Unit」体制をもとに、協働しながら複数の活動を並行しておこなっている。

2018年市民プロジェクトとしては以下の事業をおこなった。自分のアイコン・こけしを作るワークショップ(子ども向け)。ミミヤママシン(大阪)企画展。着物・古着のリメイク:地域高齢者と来場者が交流しながら実施。減災アート(放火リスクの高いと思われる場所で明かりのインスタレーションを実施)。洋服のかけはぎ「ダーニング」。

天明町は近隣商業地域エリアの生産の拠点だったが、産業構造の変化により住宅地へと変化した。しかし住民の高齢化が進み、今後ますます空家が増えることを危惧した自治体から新潟県立大学に相談があり、国際地域学部の関谷浩史准教授が取り組みを開始。町内にある築53年の空家を改装、移住し、その家を拠点とした会社組織を作って様々な活動を展開することにした。会社代表はパートナーの天本氏で、事業のハンドリングをおこなっている。

調査協力団体

越人会

〒950-1147 新潟市中央区高美町1-16(有)カメガイアートデザイン内 TEL.025-285-3045

kamegai@kamegaiartdesign.com SNS: インスタ、ツイッター、Facebook

設立年/2014年 構成員の数/3名 代表者名/亀貝 太治 回答担当者/亀貝 太治

活動の目的・趣旨

医学町ビルの活用

活動内容

2010年から空きビルとなっていた「医学町ビル」(1968年築)の活用。

テナントの誘致およびイベントの開催を通じて、地域の活性化を図る。越人会の運営で金銭のやりとりは発生せず、運営にかかわる替わりに、スポット賃料は無料という運営形態。常時イベントスペースとして活用している201号室では、ジャンルは問わないが、空間にふさわしい、越人会のビル活用の運営方針に沿った人達に一日単位で貸与。賃料を必要経費等に充てている。建物を魅力的に活用してもらうことで、価値を高め、学校町、上古町ともつながるエリア全体の魅力向上を目指している。

小須戸コミュニティ協議会特別委員会「薩摩屋企画委員会」

〒956-0101 新潟市秋葉区小須戸120-1 TEL.0250-25-7069(小須戸まちづくりセンター)

satsumaya@mail.117.cx(町屋ギャラリー薩摩屋のアドレス)

http://satsumaya.web.fc2.com(町屋ギャラリー薩摩屋サイト) SNS: インスタ、ツイッター、Facebook

設立年/2006年 構成員の数/主要メンバー(薩摩屋企画委員)12名

代表者名/佐藤喜代一 回答担当者/石田高浩

活動の目的・趣旨

「薩摩屋企画委員会」は、地域の意見をまとめて行政に伝える組織「小須戸コミュニティ協議会」の部会活動の一つで特別委員会となっている。衰退が懸念される小須戸のまちで、町歩きの拠点として、またアートプロジェクトの企画開催を行うことで地域の魅力の掘り起こしや、活性につなげていきたいと考えている。

活動内容

「町屋ギャラリー薩摩屋」は町歩きの拠点のほか、2012年の「水と土の芸術祭」では作家の作品会場として、13年からはアーティスト・イン・レジデンス会場としての機能をスタート。秋葉区の文化施設や新津美術館と連携しながら、独自の展示やパフォーマンスなどのアートプロジェクトをおこなっている。また、周辺には町屋を改装した店舗や施設も増えている。そうした施設とも協力し合い、町屋巡りをしながらまちを回遊するアートプロジェクトをおこなっている。

14年からは毎年「小須戸アートプロジェクト」を開催。作家にも参加してもらえよう、ワークショップやトークイベントなどを企画。集客も徐々に増え、次第に定着してきたという手応えを感じている。

信濃川の舟運拠点として栄えた小須戸地域には、当時の繁栄を表す町並みや町屋の建物が今も残されている。07～08年にかけて、そうした小須戸の町屋の調査とその価値を再発見するための取組みが新潟大学都市計画研究室を中心に進められ、町歩きなどの啓発活動がおこなわれた。

「薩摩屋」は空家になっていた商家の町屋で、09年の芸術祭の地域プロジェクトで町歩き拠点となったことをきっかけに、翌10年からコミュニティ協議会が借り受けて活用を開始。当初は催し開催時のみの不定期活用だったが、12年以降は土日祝日に公開するスタイルになった。

調査協力団体

タクミクラフト

〒950-2074 新潟市西区真砂1-16-18 TEL.050-5243-5769

info@takumicraft.com www.takumicraft.com SNS:FB、ツイッター、インスタグラム

設立年/2016年 構成員の数/2名 代表者名/飯塚由美子 回答担当者/川越千紗子、飯塚由美子

活動の目的・趣旨

経済産業大臣指定「伝統的工芸品」をはじめとする多岐にわたる新潟の工芸品を県内外と世界に案内している。

活動内容

インターネットを中心にした伝統工芸品の紹介活動のほか、展示販売会などの企画開催(主催)や、催しへの参加をおこなっている。また、工芸品技術者の依頼を受けて、新商品の開発協力や企画協力、広報もおこなっている。新しい取り組みを通して、より広い工芸の紹介につなげていきたい。2017年から年1、2回のペースで、北方文化博物館など新潟県内の会場での展示販売会の企画開催をおこなっているほか、新潟県伝統的工芸品組合の製作体験・展示販売を行う新潟県伝統的工芸品展のブースに参加。川越さんがかつて県職員として、伝統工芸の担当をしていたため縁が生まれ、デザイナーの飯塚さんとともに活動を開始した。

手部

〒951-8153 新潟市中央区文京町21-5 TEL.090-2636-5249

tebutebu2012@gmail.com

設立年/2012年 構成員の数/113名 代表者名/手部じゅん 回答担当者/手部じゅん

活動の目的・趣旨

部室で信頼できる仲間と同じ時間を共有し、そこでストックされていく空間を大切にしている。そして、その動きが周りにしみ出して連鎖してゆければうれしいと考えている。

活動内容

2012年「水と土の芸術祭」参加作家の藤浩志氏の「部室をつくる」というアイデアから、手でものをつくる「手部」として発足。古いもの、使われなくなったものを材料とし、利用者が自由に創作する場となり、好評を得る。13年からは新潟市こども創造センターでさまざまなワークショップを開催。14～16年には作家のアーティスト・イン・レジデンスの会場となった古町6番町にあるフルマチ・アートスタジオを11カ月部室として使用。15年岩井成昭の作品展示では、老若男女が自由に出入りするため、作家から「こんなに間口の広いスタジオは全国探してもどこにもない！」との評価を受けた。15年「水と土の芸術祭」では鳥屋野潟のボートハウスを中心に活動。17年のフルマチ・アートスタジオのクローズ後、同スペースに飲食店をオープンした方が手部に共感、店舗の一部をギャラリーとして引き続き活用。18年「水と土の芸術祭」では中央区下本町に部室を設置し、活動。ほか市内の公園の再生事業としてペインティングイベントを開催するなど、依頼に応じて活動をゆるやかに展開している。

調査協力団体

特定非営利活動法人いわむろや

〒953-0104 新潟市西蒲区岩室温泉96-1 TEL 0256-82-1066

mail@iwamuro.info www.iwamuroya.com

設立年／2010年 構成員の数／43名 代表者名／岡崎 昭 回答担当者／小倉 壮平

活動の目的・趣旨

地域づくり(暮らしやすい地域、観光振興による活性)

活動内容

運営のテーマは、「間口を広げる」こと。外から見ると品がある温泉地で敷居の高いイメージが先行する地域だが、ここで何かやりたい人を受け入れ、地域内外の人の交流の場としての機能を目指している。ママさん世代の方がハンドメイドの商品を販売したり、マッサージ等の施術体験をする「ぼかぼかマーケット」を毎月開催するほか、イベントスペースを利用して催しを開催。現在売出し中の若手ミュージシャンを集めた音楽祭「いわむろロックフェスティバル」も毎年開催し、2018年は二日間で万人近くの集客があった。また18年9月には、障がいのある方の作品を中心に「岩室あなぐま芸術祭」を開催。作品そのものだけでなく、作品もっている関係性や背景のストーリーを、岩室温泉街や観光客にも感じてもらうことを狙った試みにより、福祉とのつながりが生まれ、普段なかなか出かける機会も少ない身体に不自由を持つ方たちも温泉街に足を運び、集う芸術祭となった。指定管理料と売店の販売売上で運営。スタッフには、観光協会や旅館組合の職員もいるため、地域のさまざまな団体と常時情報交換が可能な組織となっている。

岩室は、もともと落語家の立川談志さんとのつながりのある地域であり、当時地域活性化を考えていた村が武蔵野美術大学の建築学科の先生にアプローチしたことがきっかけとなり、03年に村と大学の連携事業として「アートサイト岩室温泉」がスタート。13件の旅館を会場に学生が卒業制作の作品を飾った。二年に一度の開催で、15年で一旦事業は終了。また、同大学が「地域のランドデザイン」という施策に取り組み、岩室を舞台に文部科学省のプロジェクトを展開。いわむろやもこのプロジェクトで学生から提案されたもので、地域と建物の設計者、行政が話し合う場をつくり、生まれた施設。学生のさまざまな提案に対応する会として、地域住民が母体の「いわむろみらい研究会」が発足。10年市町村合併により配分された予算により、村が長年計画していた観光施設であるいわむろやが設置され、施設を管理運営する組織として、「いわむろみらい研究会」をNPO化し、現在に至っている。

新潟と会

〒950-3126 新潟市北区松浜4-3607-370 TEL.080-3126-1684

aganogawa210@gmail.com

設立年／2017年 構成員の数／5名 代表者名／小川 栄爾 回答担当者／平岩 史行

活動の目的・趣旨

単発の事業ではなく、「新潟と」と「何々」というようにメンバーの関心、テーマに応じて、新潟を多様な観点から見つめ直すプロジェクトを継続的に開催する活動を行う。

活動内容

新潟「と」何か、というテーマで活動を行なっている。2017年には「映画監督佐藤真と新潟」をテーマとして佐藤真監督映画全作品を新潟・市民映画館シネ・ウインドを会場に上映。トークイベント、コンサートを開催した。同時期、砂丘館では関連資料を展示(主催は砂丘館)。18年は「新潟と潟」のテーマでシンポジウム「人と潟の共存する未来」をBricoleの協力を得て、「水と土の芸術祭」市民プロジェクトとして開催した。

映画監督・佐藤真没後10年記念の催しを機会に発足した。会の名称についてはアーツカウンシル新潟からアドバイスをいただいた。

調査協力団体

西堀ゆきわ

〒951-8062 新潟市中央区西堀前通1-699 TEL.090-3757-0005

設立年／2018年 構成員の数／4名 代表者名／志賀恒夫 回答担当者／志賀恒夫

活動内容

一つ一つは大きな力でなくても、多様で豊かな思いや活動する人々が集い、それにより周囲をも豊かにしていける場にしたいという思いで2019年に開設したシェアショップ。築100年余の建物を有志で改装し、個人経営者や作家活動を行うメンバーが場を共有しながら活動をおこなっている。

ショップ／ミニギャラリー「フラジャイル」／オーガニックショップ「珠屋」／古書店「ザ・クロニクル」

ねんど作品販売「ねんど母さん工房」／木のおもちゃと雑貨「うれしい」／カフェ「よろめく」

カフェ居酒屋「鳥の歌」／小さな図書館「マイクロライブラリー」

ミニギャラリーに利用料は1週間1万円で、気軽に作品発表がおこなえる設定にしている。

2Fには私設図書館と講座などができるフリースペースがあり、随時利用ができる。

浜メグリ

TEL.090-1754-3744(吉岡)

設立年／2008年より開催スタート 構成員の数／コアメンバー10名程度

代表者名／吉岡謙治(2019年秋から嘉向雄太郎) 回答担当者／吉岡謙治、嘉向雄太郎

活動の目的・趣旨

越前浜・角田浜・五ヶ浜で創作活動を行うクリエイターの工房公開と作品展を中心に、地区内の民家やギャラリー、ワイナリーなどの会場で様々な自主イベントが企画開催される、地域全体のイベント。来場者はエリア全体を歩いてめぐり、楽しんでいる。毎年春と秋に開催。

活動内容

古民家の染色工房「橙鼠」が2008年以前に自身の工房を会場として活動していたが、「橙鼠」解散後、間もないタイミングで工芸家2名が越前浜に移住し、「橙鼠」代表とその2名が工房展活動を再開。新たな参加者も募りイベント名を「浜メグリ」とした。現在は毎年春と秋にそれぞれ3日間開催している。回を重ねるごとに参加作家や会場が増え、現在は角田地区コミュニティ協議会の活動の一つとして、アートイベントより地域イベントの色合いが濃くなっている。

毎月1回行われる会議には、30代～70代と幅広い年代の参加者があり、地域出身者も移住者もいる。

移住者である作家が中心となってスタートした「浜メグリ」だが、当初は地域住民の中から疑問視する声もあった。地域に受け入れてもらえるよう、告知チラシを全戸配布し、機会があるごとに勧誘の声がけをおこなうなどの努力をし、またメディアで取り上げられることも増えたこともあって、次第に受け入れられるようになり裾野も広がっていった。現在は地域あげての催しとなっている。来場者も多様化し、最近では古民家のリフォームや地域の暮らしについての質問も多くなっている。

調査協力団体

ヒッコリースリートラベラーズ

〒951-8063 新潟市中央区古町通3-556 TEL.025-228-5739

mail@h03tr.com <http://www.h03tr.com> SNS:インスタ、ツイッター、Facebook

設立年/2001年 構成員の数/8名+パート10名 代表者名/迫一成 回答担当者/迫一成

活動の目的・趣旨

「日常を楽しもう」のコンセプトに基づき、創作やデザイン活動を地域に根ざしながら実験中。

活動内容

店舗を持ちながら、自前のイラスト、デザイン、Tシャツ、雑貨などの表現活動とビジネスを合体。店舗が上古町商店街に位置しているため、地域性のある商品開発や売り方を展開。上古町の店舗のほかに、新潟市美術館内のミュージアムショップルルも運営。

2009年の「水と土の芸術祭」への参加にあたり、新潟市の珍しいお菓子でお土産にふさわしいものを探す中で出会った伝統菓子「ゆかり」は、パッケージデザインだけでなく、流通ルートの開発も担当。

近年は、地域の困りごとを自分たちのデザインやイラストを使って改善する活動にも注力している。

BOOKS f3

〒950-0075 新潟市中央区沼垂東2-1-11 TEL.025-288-5375

info@booksf3.com <http://www.booksf3.com> SNS:fb

設立年/2015年 構成員の数/1名 代表者名/小倉快子 回答担当者/小倉快子

活動の目的・趣旨

写真展もおこなう本屋として2015年に開店。敷居が高いと思われがちな写真作品や写真集に、気軽に接することができる場にしたい。

活動内容

写真集の新刊・古書を揃えた本屋であり、写真展の企画開催を行うギャラリーでもある。作家を招いたトークやワークショップなども積極的に開催している。特に若い世代に対して、良い写真や写真集に触れる機会を増やしたいと考えて模索をしている。店主の小倉さんは、大学で写真を学び、東京では写真に関わる会社でカメラマンと編集の仕事に就いていたが、ある専門書店で写真集を選んでもらう経験をし、写真集の魅力を再認識。自らもその職に就きたいと考えるようになった。香川県でブックカフェの立ち上げに関わり、その後新潟に戻って現在の店舗を開いた。

Bricole

〒950-0872 新潟市東区牡丹山1-29-6 TEL.090-9969-1136

info@bricole.jp <http://bricole.jp/>

設立年/2013年 構成員の数/5名 代表者名/楳沢和典 回答担当者/楳沢和典、楳沢厚子

活動の目的・趣旨

地域の歴史・土着文化の拾集、土地に根ざした生業や暮らしの継承をめぐり諸々の取材や発表等の活動を実施。

活動内容

岩室温泉にある古民家KOKAJIYAの2階スペースで古本屋をしないかと誘われたことが始まり。何も知らない岩室の地域を知るきっかけづくりの場にしよう、蔵の中で眠っていたわら細工を見つけたことから、作れる人に会いに行き、ワークショップを開催。昔から日本にあった「室礼」から派生してイメージを広げ、もう一度、今、しつらえるとしたらどうするか、という発想のもとで、展示や活動を展開している。すでに打ち捨てられている、価値がないと思われるものを組み合わせることによって、新たな機能を持たせるような可能性を追及している。

これまでの活動としては、岩室温泉KOKAJIYA2F「室礼—シツライ—」の企画・運営、フリーペーパー「ひとひら」発行、映画『阿賀に生きる』フィルム上映会+いろいろ座談会開催、注連縄・玉メめ注文販売、ワークショップの企画運営など。

調査協力団体

べつのみかたプロジェクト

〒950-0081 新潟市中央区三和町5-25 TEL 090-7192-9689

ish.seiko@gmail.com https://twitter.com/betsuno_mikata

設立年／2018年 構成員の数／4名 代表者名／石山聖子 回答担当者／石山聖子、三富章子、茅原登喜子

活動の目的・趣旨

市井の人々の営みの中から生み出され、特に実用性以外の価値を見い出されてこなかったモノたちを、「造形」の視点から「発見」し、リサーチを通して考察。文化の多様な理解につなげていくこと。

活動内容

アウトサイド文化遺産の研究・研究過程・成果を情報発信。

2018年の「水と土の芸術祭」市民プロジェクトに参加。「災害遺産」をテーマに、レクチャー、ワークショップ、べつの見方展(ミニワークショップと説明会)開催した。今後はSNSを中心に情報を発信していく予定。普段気にとめられないものを、見方を変えて、注目されないものに光を当てる活動をメンバーがそれぞれ10年くらい行っていて、それぞれの活動を紹介合っていたが、このような、頑張っって何かを発見するのではなく、ライフスタイル化しているものの見方を、いろんなことに応用できるのではないかという思いから、「水と土の芸術祭」の市民プロジェクトに参加。これまでは新潟に限定せずに行っていた活動を、新潟に着目して展開した。誰かが何かに興味をもつその「入り口」、どうやってそこに入って行くか、また、そこからどう広げていくか、を大切に、教科書に書いてある事ではなく、自ら発見し、考察を楽しむ。造形をきっかけとすることで、美術的な楽しみ方もできる。

まちごと美術館

〒950-0982 新潟市中央区堀之内南1丁目32-16・3F 株式会社バウハウス内 TEL.025-248-1960

toiawase@cotocoto-museum.com <http://cotocoto-museum.com/>

<https://www.facebook.com/cotocoto.museum/>

設立年／2016年 構成員の数／4名 代表者名／肥田野正明 回答担当者／肥田野正明

活動の目的・趣旨

障がい者アート作品のレンタルを通じて、障がい者の収入につなげる。

活動内容

複数の福祉施設と連携しながら、障がい者アートのレンタルを実施。

2018年11月現在、新潟市内を中心に59か所(東京、長岡を含む)で118枚の作品をレンタル中。レンタル先は、スーパー、BRT乗り場、寿司屋、銀行、スーパー銭湯、モスバーガーなど。登録作家は17名で、登録作品は154点。作品は油彩以外は、原画をスキャンして印刷したもので、レンタル料は1カ月3000円。このうち、作家へ500円が支給されるシステムとなっている。2か月に一度、毎月1日と15日を作品替えの日と定めて、展示替えを実施。作家にとっては、収入だけでなく、大勢の人に見てもらえることも励みとなっている。

作品の選定基準は「主婦目線」で、楽しいものであること。人気がないもの、芸術性が高すぎるものは選ばない。

始まりは、05年に本業が清掃業である肥田野さんが、掃除の仕方を教えるために訪れた新潟大学の特別支援学校で、一日中絵を描き続けている生徒を見たこと。ちょうど障がい者の雇用に関する法律が改正された時期でもあり、生徒が社会参画できないだろうかと考えたことが出発点。まずは肥田野さん自身が生徒の絵を買い、事務所に掛けたところ、見た人から反響があり、絵を街に出してはどうか、レンタルができないかと考えた。その後、経営者が集まる見本市「ビジネスEXPO」にブースを出展。62社にアンケートを取ったところ、97%が作品のレンタルに関心があることがわかり、53%が一か月3000円までなら支払えると回答。市場リサーチを経て、活動を開始した。

事業を始めてから現在に至るまで、いわゆる営業をしたことはなく、招かれて行った講演参加者から、「うちにもぜひ」との声が出るなどして、利用者数が増えている。

作品レンタル以外にも、各地のイベントや展覧会に参加し、作品を展示している。

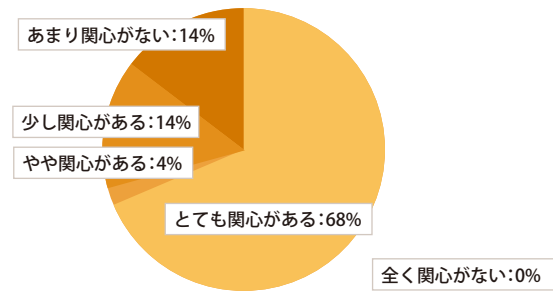
◆「美術」と「アート」について

ここでは「美術」と「アート」を次のように定義します。

「美術」 絵画(日本画・洋画)・彫刻・版画・写真・工芸・書などのジャンルを総称し、主に団体展・グループ展・個展などの形で発表される視覚・造形表現活動。

「アート」 インスタレーション、映像の多様な活用、環境・場・身体性・プロセス重視、観客参加型などの形態をもち、近年の芸術祭などにおける中心的表現となりつつある視覚・造形表現。

設問1 「美術」への関心の程度について



設問1-① 関心があると答えた方

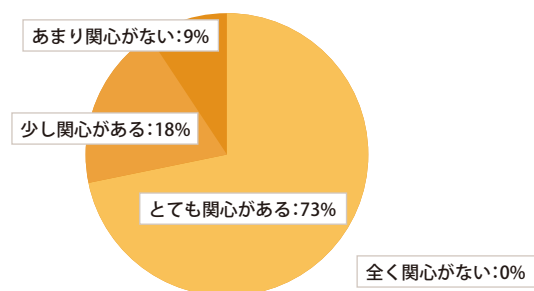
関心のある「美術」のジャンル(複数回答:単位ポイント)

洋画	14
日本画	14
彫刻	10
版画	11
写真	16
工芸	14
書	8
その他:美術教育	1
その他:現代美術	1

設問1-② あまり関心がないと答えた方 その理由

- パーツとしては興味があるが、積み上がって評価軸ができたものについて、美術に限らず疑問がある。普段の生活の中に美術はあまり入っていない。そもそもカテゴリーに興味がない。むしろ、美術と括られているもの以外のところから、美術を掘り起こす方に興味がある。
- 身近に美術に触れる環境で育っていないため、美術館と縁がない。知り合った作家の作品を見に行くことはあるが、主体的に行く習慣がない。逆に普段、関心がない人も旅行の時に美術館やギャラリーに行く人が多い。そういう人たちは美術が日常ではなく非日常。
- 興味がないわけではないが、スケートボード最優先の生活を送っているため、他に関心を向ける余裕がない。

設問2 「アート」への関心の程度について



設問2-① 関心があると答えた方 「アート」のどのようなところに関心があるか

- 新しい視点をくれるところ。作家の脳みそを覗き込むように推理して読み解くのが面白い。その人の考えや思想、何がこうさせているのか。いろんな学問を網羅するものであるところ、知的好奇心をくすぐるようなところもよい。
- アートが現在持っている幅に関心がある。アートがどういう幅を持って人の概念に入っているのかに関心がある。
- 芸術には関心がある。インスタレーション、映像、メディア、文化美術的表現は、自分の生活において、何かをするときに参照し、自分の中の基準を決めるのに大事な要素として存在している。
- 「アート」の括り方にもよるが、その時代において、何が出てくるのかに関心がある。
- インスタレーションなど、空間を使ったアートに現在関心がある。作家によっては、店舗空間をそっくり使ってアプローチする展示を行うこともある。ただ壁にかけてみせるだけではなく、その場所の環境に応じて行われる展示方法に刺激を受け、空間表現に興味を持つようになった。それによって店を訪れる人へのアプローチも広げられると思う。
- 「美術」はそれぞれの分野でかっちりとした体系ができていて、すでに世界が出来上がっているような硬いイメージがあるが、

「アート」はもう少し幅が広く、関わりを持ちやすいと感じている。「美術」より「アート」の方に広がりを感じる。

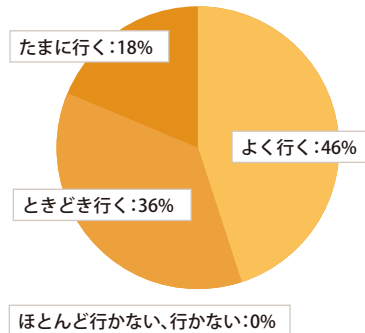
- 美術展は完成されたものと感じられるが、アートは作っていく過程が見えたり、中には参加できるものもある。今まであまり縁がなかったが、今後はもっと関わりを持っていきたい。
- 付加価値を与える手法、橋渡し役としてアートは力を持っている。目に見えないものを可視化することができるし、空間のほか、時間を表現することができる(動画など)。
- どこか境界線を越えていく力がある。大地の芸術祭は、閉鎖された地域の雰囲気を払っていき力があり、個々にとっても生きる力をふいに与えることができるなど、見えない作用も含めて関心がある。
- 現代アート、映像、インスタレーションなど。人生を豊かにしてもらえる。自分とは違った気付きを得られる。アーティストの優れた表現でそれを発見できる、与えてもらえるのが好き。グロテスクだったり批判的な作品よりは、美しい、ハッピーな作品、スケールが大きく、体感できるものを観る。従来の、ある種かたまっている美術とはまた違う面白さがある。とはいえ、もちろん同じような気付きは「美術」からも得られるが。
- 思いがけない瞬間があること。時代の変化も感じられるし、普遍的なもので驚かされることもある。その意味で海外のものを見るとおもしろい。新しい視点を得られる点に関心がある。
- 作り方、素材、環境、展示の肝となる考え方。作品(もしくは展示されている状況)を作り出す作者の情動。作り手の感覚とそれを観た自分がどう感じるかに興味がある。
- 例えば、効率、処理能力、性能ということを追求する傾向が強いが、効率一辺倒で本当にいいの?という問いを投げかけたり、単純に表現できないような、もやとした感情をどうにかできるのがアートだと思う。その、もやとしたものを、アーティストはどうやって具現化しているか、それを受け手がどう反応し変化を及ぼしているのかといったところ。
- 一つは、今後、アートの活動が社会的活動として継続していくには、どういうやり方があるのだろうかという関心。もう一つは、アートが持つ「別の見方」。人が作り出したもので、営利を目的とせず発生しているものに、目を向けさせる力が、アートにはある。
- 既存の形にとらわれない可能性について関心がある。いろんな形が出てきているので、ゴールはないというイメージ。一番興味があるのは、コミュニティデザインやソーシャルデザイン。作品によって生活が豊かになるなど、機能性があるものがよいと思う。
- 美術関係の教育を受けていないので、単純に興味だけで見ているが、自分の意識を飛ばしてくれる体験ができる場所に関心がある。現実から離れてみたいという気持ちを満たしてくれて、映画とも音楽とも違う刺激をもらうもの。そういう意味では「美術」も同じではあるが、知識がない自分が行くには腰が引けるため、有名な作家だと見に行きやすい。
- いわゆる「美術」ではない表現に興味がある。各地で開催されている、その土地・地域のものを吸い上げながら表現をおこなっている芸術祭に興味がある。
- すべてにわたって。
- ちょっと皮肉も込めて、見るのが好き。アートの意味のなさ、理解できない部分に対して「だから、何?」という興味がある。

設問2-② あまり関心がないと答えた方 その理由

- アートに関心がある人を見ていると、チラシをチェックし、自ら足を運んでいるが、そういう関心は自分にはない。無知なので、少し知識があれば、アートももっと楽しく見られるとは思いますが、現実的に時間がなく外に自由に出かけられないということもある。

◆美術館(類似施設含む)について

設問3 美術館に行く度合い



設問3-②

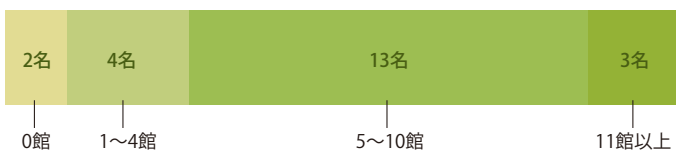
美術館に行く目的(複数回答:単位ポイント)

展覧会(企画展)	21
美術館のコレクション	9
ミュージアムショップ	8
雰囲気を楽しむ	6
その他	6

設問3-① よく行く美術館

新潟市内の美術館

〈複数回答であげた美術館の数〉



〈具体的な美術館名〉※()は館名をあげた人数

- 新潟市美術館(17)
- 新潟市新津美術館(8)
- NSG美術館(1)
- 万代島美術館(12)
- 北方文化博物館(3)
- 各区の民俗資料館(2)
- 砂丘館(9)
- 北区郷土博物館(3)
- 石油の里・中野家(2)

新潟市外の美術館

〈複数回答であげた美術館の数〉



〈具体的な美術館名〉※()は館名をあげた人数

新潟県内

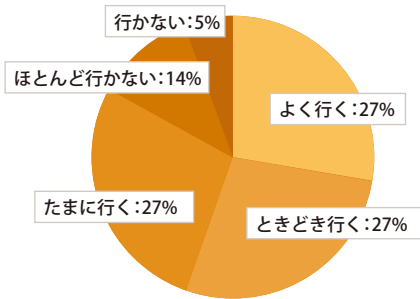
- 新潟県立近代美術館(2)
- 国立新美術館(2)
- 原美術館(1)
- 新潟県立歴史博物館(1)
- 国立西洋美術館(2)
- 水戸芸術館(1)
- キナーレ(1)
- 東京国立近代美術館(2)
- 金沢21世紀美術館(1)

新潟県外

- 東京国立博物館(6)
- NTTインターコミュニケーションセンター(2)
- 発電所美術館(1)
- 2121 DESIGN SIGHT(5)
- 東京国立近代美術館工芸館(1)
- 都内の美術館
- 東京都現代美術館(4)
- 東京芸大美術館(1)
- 神奈川県内の美術館
- 東京都美術館(4)
- 国立科学博物館(1)
- 瀬戸内の美術館
- 森美術館(4)
- 東京都庭園美術館(1)
- 旅先の美術館
- 東京都写真美術館(3)
- インターメディアテク(1)
- 国外
- アーツ前橋(3)
- 東京ステーションギャラリー(1)
- 大塚国際美術館(1)
- 旅先の美術館(1)
- ウフィッツィ美術館(1)

◆画廊・ギャラリーについて

設問4 画廊・ギャラリーに行く度合い



設問4-②

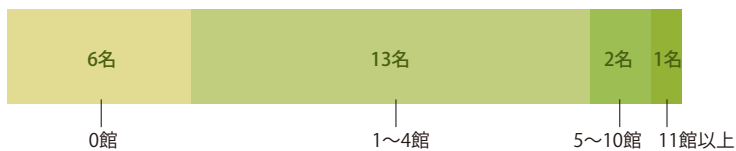
画廊・ギャラリーに行く目的(複数回答・単位ポイント)

展覧会	17		
作品購入のため	4		
雰囲気、コミュニケーションを楽しむ	6		
その他	3		

設問4-① よく行く画廊・ギャラリー

新潟市内の画廊・ギャラリー

〈複数回答であげた画廊・ギャラリーの数〉



〈具体的な画廊・ギャラリー名〉※()は館名をあげた人数

- 新潟絵屋(11)
- 和六丁目ギャラリー(1)
- vuca(1)
- 羊画廊(4)
- 北書店画廊(1)
- Shirone presso(1)
- ギャラリーろば屋(4)
- Mスタジオ(1)
- 旧小澤家住宅(1)
- 蔵織(3)
- ギャラリーゆうむ(1)
- ゲットムー(閉廊)(1)
- Kaede Gallery + full moon(3)
- 万代島ギャラリー(1)
- Ark Oasisギャラリー(1)
- BOOKS f3(2)
- 新潟市民ギャラリー(1)
- ギャラリー浜つばき(2)
- ギャラリーやまぼうし(1)

新潟市外の画廊・ギャラリー

〈複数回答であげた画廊・ギャラリーの数〉



〈具体的な画廊・ギャラリー名〉※()は館名をあげた人数

新潟県内

- ギャラリーみつけ(1)
- たびのそらや(1)
- 游文舎(1)
- ギャラリーmuan(閉廊)(1)

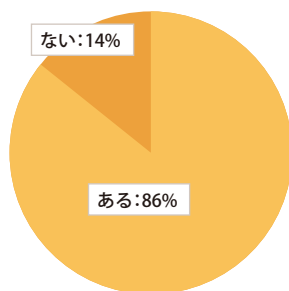
新潟県外

- ESPACE LOUIS VUITTON TOKYO(1)
- 3331 Arts Chiyoda(1)
- ミヅマアートギャラリー(1)
- TOTOギャラリー・間(1)
- ギャラリー湯山(1)
- グルグルハウス(1)
- GAギャラリー(1)

設問4-③ 行かない、ほとんど行かないと答えた方 その理由

- 画廊、ギャラリーは敷居が高いと感じている。行ってみたいけれど、知人のいない自分が入っていいのか躊躇してしまう。
- 情報が入って来ない。DMはもらうが、気がついたら会期が終わっている。SNSに慣れているので、情報媒体が紙だけだと管理ができない。仕事帰りや休日に行こうと思っても、行動のルートから外れると忘れてしまうことが多い。
- 作家さんをよく知らないなので、内輪の感じで入りづらい
- 現代アートが少ないイメージがある。自分が好きなアンディーウォーホルのようなポップな絵が少ない。そしてやはり入りづらい。

◆美術品・美術作品(工芸品、アクセサリーを含む)の購入について

設問5 美術品・美術作品を
購入したことがあるか

設問5-① あると答えた方(複数回答:単位ポイント)

購入した作品のジャンル

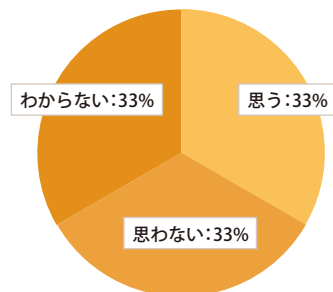
絵画	11
彫刻	4
版画	4
写真	4
工芸	7
書	3
現代アート	2
アクセサリー	1
立体作品	1

購入した場所

画廊・ギャラリー	16
古美術店	1
作家から	8
その他	3

購入した作品について

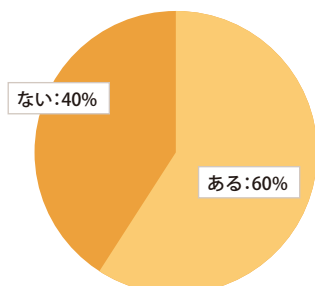
身近に飾って楽しむ	13
ときどきみる	4
あまりみない	2
その他	2

設問5-② ないと答えた方
今後購入したいと思うか設問5-③ 購入したいと思わないと答えた方
その理由

- 交換するなどして、人からもらうので。今のところ買おうとは思わない。

◆美術品団体について

設問6-① 美術団体との交流はあるか



交流している団体

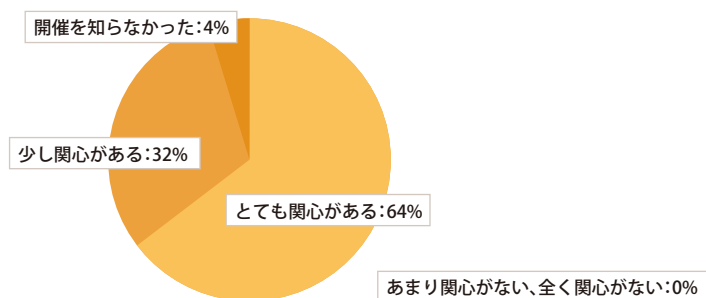
- 新潟絵屋
- 水と土の芸術祭市民プロジェクトのグループ
- 水と土の芸術祭実行委員会
- 地域のアマチュア写真サークル
- NPO法人アートキャンプ新潟
- 岩室あなぐま芸術祭実行委員会
- 新潟県伝統的工芸品組合、産地組合
- 新潟県アールブリュット・サポートセンター
- 武蔵野美術大学
- アーツカウンシル
- 作家
- シネ・ウインド
- ほか、県外多数

設問6-② 高齢化と後継者不足を大きな課題としている現在の新潟市の美術団体に対しての意見

- 後継者をつくろうと思わなくてもいいのではないか。
- 団体から届く情報に魅力がない。情報の開示の仕方が紙媒体しかない。ウェブやSNSをもっと活用すべき。
- 特にない。美術、骨董、アートなど、カテゴリーで動いているもの自体に興味がない。
- 個人的には美術、骨董、アートなど、カテゴリーとして成立しているものよりも、そこからはみ出しつつあるものに興味があるので、そういう動きをキャッチできるような団体が増えると嬉しい。
- もっと間口を広く持った方がいいのではないか。
- 課題解決のため、どのようなことをされているのか具体的なことがわからないので想像の範疇だが、自ら敷居を高くしているのではないだろうか。若い人の関わりが少なければ、若い人の入り口はさらに狭まるだろうし、年配の方の声が大きければ、それも若い人の入り口を狭めている原因にもなると思える。若い人たちに本当に入ってきて欲しいと考えているのだろうか。もしそうだったら、若い人たちが入れる環境、受け入れる環境があるのかどうか、少し疑問に感じる。
- 美術を身近に感じて関われるような環境づくりが必要ではないか。関われないうえに興味はあるという人はいる。既存の組織には入りにくいという人たちは、自分たちはすくい上げていきたいと考えている。
- 敷居が高く若い世代がはいるにくいのではないか。上下関係や細かなルールが多いと、参加する人の気持ちが萎える面もあるかもしれない。また、関心を持つ人がいても、どういう団体がどこでどんな活動をしているのか情報が入手しにくく、関係の仕方がわかりにくい。ギャラリートークやイベントなどを開催し、直接会話ができる機会があるといいのではないか。
- そもそも若い人に入ってほしいのかどうかわからない。(素朴な疑問)。外に向けて開く方法をわかっていないのでしょう。危機感が具体的でないことに原因があるのかもしれない。美術団体自体に価値があれば続くかもしれないが、美術団体が何をしているかわからない。一方で、なくなって初めて(その価値に)気付くというのも事実。アーツカウンシルとつながるなどして、まずは、web上のプラットフォームを作り、どのような団体が存在し、どのような活動をしているのかを、誰でも自由に閲覧できるサイトを作り、情報を残すことから始めてはどうか。
- 〇〇展に出品するような美術団体は、作品自体はおもしろくても、その団体に対しては、息苦しさをを感じる。政治的なものも感じる。後継者を探す前に、団体を存続させる意味があるのか、新しい状況や考え方に対応できるのか(「今までのやりかた」「成功例」に固執していないか)、「後継者」を労働力と捉えていないか、自分たちの活動に魅力があるのか、残さなければならぬ価値のある(支持されている)組織なのか、団体の方には考えていただきたい。
- 美術団体側は「自分たちの作風が全て」という印象がある。例えば、水と土の芸術祭の市民プロジェクトに参加していると言うと、「あー」みたいな感じで、否定はしなくても、スーッと去って行くように。
- 自分たちの作品発表ではなく、若い人達のグループとプロジェクトとして合流するというかたちもあるのではないか(簡単なことではないが)。若い人は先輩達の話聞きながらできるし、お互いに考えるおもしろさを実感しながらできるのではないか。
- 特にない。気にしたことがなかった。
- よくわからない。ものづくりサークルは、高齢化してますます需要が多くなるはずであり、その人達の受け皿が必要なはず。若い人は場所を探し、連絡を取って勝手にやっているのではないか。
- 美術団体が構成員の募集はしているが、本当に新しい人を増やすことを望んでいるのか疑問がある。団体側が間口を狭くしているように見える。求める人材と入りたいと思う人が合わなかったりでなかなかうまくいかないのだと思う。私の周りには入りたいと思う人はたくさんいるので。
- オープンではないと感じる。どういう団体があってどういう活動をしているのか、情報を入手しにくい。ネットワークを築いたり、ポータルサイトを作ったりするなどして、身近に感じてもらえるようにするなど、気軽に参加できたり、作品を見たりできるようにする工夫が必要では。団体側の柔軟さ、受け入れ態勢を柔らかくするなどの取り組みが必要だと思う。
- 高齢になったら引退を考えてもいいのではないか。会員不足というが、経済的理由でやめる人もいる。
- 美術団体には、作家として成り立っていくためには「先生」の意見を取り入れて制作しなければならないという構造がある。それぞれの団体のカラーに沿わなければならない、自分が思うものを自由に作れなくなる。団体そのものに違和感を感じてしまう。
- 高齢化による後継者不足はどの世界にもあると思うが、その団体やそこで活動している人たちに魅力がなければ後継者が育たないように感じる。受け継ぎたいものがあれば、年齢が高くなっても輝いている人たちがいれば、後継者はついてくると思う。

◆「水と土の芸術祭」について

設問7 「水と土の芸術祭」への関心の程度



設問7-① 「水と土の芸術祭」への関心、評価について

評価する意見

- 2018年は、とても見やすい芸術祭だった。アートプロジェクトは、2015年と比較すると2018は市内でコンパクトに回れる点で大きな進歩があった。万人が見やすく、安全面やアクセスの仕方も向上した。主催者の工夫は評価に値する。
- 市民プロジェクトは、アートの枠ではない活動をしている人たちを吸い上げる役割を果たしていた。無名の市民の活動が見えるようになったことに価値がある。

課題提示をする意見

- 市民プロジェクトを「水と土の芸術祭」の一番の特徴としているが、公式に記録をするというところが抜け落ちている。外からの評価を仰ぐためにも、公式に内容を記録すべきである。芸術祭が何に向かって行っているのか、だんだんよくわからなくなってきたというのが正直なところ。主体である行政が縦割りにしすぎず、部や課をもっと横断しながら進めれば、もっといろんなことが展開できたのではないかと。一方で、新潟市の職員が芸術祭にかかわったからこそ、異動後も前例踏襲主義から外れて、新たな試みにも積極的に向き合ってくれていることは、もうひとつの成果だと感じている。
- 2012年の「水と土の芸術祭」で、友人が招待作家として滞在、制作しており、2018年に市民プロジェクトとして関わりを持った。これからどうなっていくのかということを含めて関心がある。疑問に思っていたのは、水と土の芸術祭のブランディングという大事な部分が、毎回動いていた感じがしたこと。都市型の芸術祭として、もう少し磨き上げができればよかった。市内のいろんなところに顔を立てなければならぬ部分もあるのだろうが、それがゆえにほんやりした印象になってしまったと感じる。行政の方が一生懸命取り組まれているが、何か足りず、もったいなかった。もう少し認知度が上がってもよかったと思う。
- 2009年は、哲学だけが、「大地の芸術祭」を真似ただけで、スケールが小さく、ハードが弱くてショートしている印象であった。12年で初めて仕事として関わり、大変ではあるが、関わる意義があると感じた。振り返るとこの年が一番チャレンジしていた回だったように思える。15年は、12年の改善点について、反省の仕方が違っていた。守りに入ってしまい、かつ、芸術祭の開催に対して政治・行政が入りすぎた。やりたくてやっている印象が薄かった。アートを楽しめず、ベクトルがおかしかったのが残念だった。18年は、私たちは仕事としてのショップ運営は、これまでの経験から、やり方をさらに改善し、職場としては最も手応えのあった回であった。市民プロジェクトは、素人である市民が主体となり構築するものであり、時間とお金が必要ではあるが、仕組み自体は賛成。文化祭的に市民プロジェクトだけを開催するならよいが、芸術祭とくっつけたことで、税金の無駄使いと言われる。やり方が不器用。山形市で開催される東北芸工大主体のみちのくトリエンナーレが大好きで、大学が企業として、地域に根ざして開催しており、アート性が高く、地域性も感じる。グラフィックも良い。越後妻有大地の芸術祭は、家族で行くのでそんなに見て回れないが、作品のおもしろさを毎回感じる。編集力と質が高い芸術祭だと思う。
- 水と土の芸術祭がきっかけでたくさんの人と話したり、いろんな経験をし、180度人生が変わった。他にもグループを作ったり活動をした人たちがたくさんいた。その点に関しては意味があったと思う。一方で芸術祭が市民に認知されておらず、何をやっているかわからないため、税金の無駄遣いだという批判を受けているのも事実。運営上の改善点など、なかなか次に引き継がれなかったり、やり方を少し変えたらもっとよくなったのに、もったいないという思いがある。
- 2012年がとてもよかった。岩室や大かまの展示が記憶に残り、イベントも興味のあるものが多かった。2018年は印象に残っていない。家族で見に行ったが、一般的レベルでお勧めできるかということ、2018年は厳しい。作品のクオリティーとボリュームに不満あり。地域で埋もれた場所の掘り起こしをどんどんやってほしい。場所を見つけていいアートを展示することをもっとやってほしい。
- 名前は知っていたが、3年に一度開催されるということも去年(2017年)知った。見てはいないが、3年に一度開催という手法は、イベントを主催する手法として興味がある。

批判(批評的)意見

- 仕事として直に関わっていたときは、どっぷり浸かりつつも、外からの目線でも見ていたため、市民プロジェクトを芸術祭でやる必要があるのだろうかと感じていた。芸術祭でいるんな人と知り合えたことは、経験としては非常に大きいですが、芸術祭そのものの内容については、2012年以上のものは以降出てこなかった。市の思惑、観光とか別のものに使われているだけなのでは?という市民の視点に立って見ていた。一部の人だけの利益になるようなものではなかったか?という気がする。
- アート作品は、水と土の芸術祭2012の質はいいと思ったが、それ以降は、興味を持たずにきた。
- 関心がないわけではないが、やり方が好きではない。大変だとは思いますが、もっとうまいやり方があるのではないかと。関係者たちだけで盛り上がっていて、そうではない市民との意識のギャップが大きいと感じるが、そのことに気がついていない、もしくは重要視していないように思える。その点について違和感があるし、好きではない。本来は作品を見て欲しいという純粋な気持ちを中心にして欲しいのに、ただやって終わり、それも身内だけ集まって、それで完結してしまう。それでは作家にもお客さんにも失礼だと思う。それは芸術祭とは言えないのではないかと。告知が甘い点にも疑問がある。単発のイベントだと検索しても出てこない、引っかかってこないものがある。一般の人が、SNSやチラシなど手軽に情報を得て、興味を持ってふらっと行けるようなものでなければ何のための芸術祭なのだろうと思ってしまう。とてももったいないと思う。
- 2015年までの間に、市民プロジェクトへの注目が大きくなっていったが、骨子案に市民プロジェクトとアートプロジェクトの連携といった記述があったのにいつの間にかそれがなくなり、2018年は市民プロジェクト、子どもプロジェクト、アートプロジェクトの3つに切り離されてしまった。地域拠点プロジェクトは市民プロジェクトとアートプロジェクトの融合でできているはずなのに、この2つを分断してしまうとそもそも目的から離れてしまうのではないかと。市民プロジェクトについては、イベントが多くなりすぎて全体として何をやっているのかわかりにくくなった。また、市民が主役と言っても、結果的には「一部の市民が主役」になってしまって、それ以外の市民はそもそも情報を知らなかったり、関わり方がわからなかったり、冷めた目で見ていた状況になっていたと思う。市民プロジェクト自体が、知り合い同士の中のうちうちの動きになってしまって広がりがあまり感じられなかった。
- みずつちと篠田市長の評価がイコールになっていて、文句を言う標的になっているように感じた。政治に強い興味を持っているご高齢の方にアンチが多い印象もある。みずつちは身内感が強いので余計に反発が強いかもしれない。市民プロジェクトについて、提案に対してなぜ採択されたかが公開されていないので理由がわからない。実施する側としては、それで収入になるわけでもなく、ボランティア的に活動をしているが、内容や活動に対して評価をされるわけでもない。とても事務的な印象を受ける。
- 大学として協力をしたが、丸投げして終わりという印象だったし、外部から人も来なかった。2018年の開催は無理やりだったように思える。歓迎されていない雰囲気があって、参加すること自体にリスクがあるようにも感じられた。生活の中のアートは大事だと思うので参加をしたが、主催者側の意図や考えがなんなのかわからないままだった。
- 毎回変わりすぎて、一貫性がない。特に2015年以降は市民に媚びているように感じる。アートプロジェクトではなく市民プロジェクトに移行し、それはそれでいい面もあるが現代アートの1ファンとしては物足りない内容になった。新しい見方や刺激を与えられることが少ない、印象に残らないものになってしまった。市民に開かれた内容にすればわかりやすくはなるが、歩み寄りがすぎて、本来のアートの魅力が薄れたのではないかと。目立った個性が感じられず、「新潟の」という流れになりにくかった。強力なリーダーがいなかったのも理由ではないかと。意見交換の場も少なかった。「こうしたい」「こうしてほしい」など、様々な声を聞く場があったら良かったと思う。
- (市民プロジェクト2018に関して)新潟市の切実な課題を解決する方法を市民プロジェクトとするならば、もっと主催者側はサポート(関心をもって対応)してほしい。プロジェクトの内容は申請書に書かれた内容でしか判断せず、組織内外の横のつながりもない(少ない)。評価も主催者の報告書任せ。「何でもできる」人が現れてくるのを待っているような印象で、ここで人を育てていくという姿勢は感じられなかった。
- 現在の市民プロジェクトは自分たち(実行委員会)の労力と金をかけず、入場者数やイベント実施数をかせぐための企画という印象。市民プロジェクトの出資金は8割。2割の実費と企画準備運営の労力はすべて主催者(市民)。申請や報告書に関わる書類も煩雑。広報も協力的とは感じなかった。
- (芸術祭全体に関して)「芸術祭」全体の枠組みに組織が見合っていない。労力(スタッフ数)・資金・準備期間等の見通しが甘すぎる。スタッフが自分の仕事をこなすことで精一杯で、与えられた役割以外に意識が向いていない印象。同じ「水と土の芸術祭」と銘打っていても、回数を重ねた蓄積も感じられず、毎回リセットし、どんどん「やりやすい」方向、色の薄い方向へ流れて行っていた印象。特に、パスポートの有料・無料の件、公募をやめた件はがっかりした。価値のある物として芸術を提示するならば、(2015年に)全ての作品を無料にするべきではなかったと思う。お金を払って観たものにある程度の満足をするので、今後、そういうものに「金を払う」という意識が生まれるのではないかと。作品をつくり展示し維持するには金がかかるというあたりまえのことへの理解もない状況では、今後行政の美術分野への出資も難しくなるのではないかと危惧している。タダで観ることができたものに、やっぱりお金を払ってくださいというのは難しい。2018年の、当初は無料として発表し、資金不足からやはり有料とした件は、言うまでもない。また、公募をやめた件(2018年)も、作品選定の幅を狭め、意欲のある作家への門戸を閉ざし、自分たちが知っている「いままでどこかで評価されてきたもの」の提示でしかないのではないかと。作家選定のプロセスは分からないが、水と土の芸術祭に関心がある作家側からのアプローチの機会を無くした事実は大きいのではないかと。地元で行われる芸術祭ということで当初から期待を持ち、実際面

白と感じた作品、企画、イベントも多くあったのだが、4回を通しての顛末に残念さを感じている。

●「大地の芸術祭」や佐渡の「銀河芸術祭」、そして「水と土の芸術祭」と県内で三つの芸術祭が開催されているが、つながりは感じられない。「水と土の芸術祭」が、そもそも何のための芸術祭かわからない。2009年は北川流、その後都市型にスライドし、あれもこれもやると言っていたのが、最後は市民プロジェクトがメインとなっていった。市民文化祭的においが、回を重ねるごとに増していったように感じる。

●毎回軸がブレる。参加する側としても、どう自分の軸足を置いていいのかわからない。また、切実な課題(オモテでもウラでも)の存在やそれに対する鋭い意識がいまひとつ感じられない。切実な課題解決としての芸術祭が新潟で可能なのか?とはいつも思っている。2018年には、突然「市民プロジェクト」が前面に打ち出されて、「あなたが主役!」と言われた。課題解決の方法が市民プロジェクトだったのかもしれないが、そうだとすれば予算や展開方法についての考え方が、今までと何が違うのか、明確には見えてこなかった。

●「横浜トリエンナーレ」や「宇部市芸術祭」は、子供が体で触れられる作品が多いように感じた。芸術祭期間外でも常時触れられる作品もあった。「水と土の芸術祭」は、手で触れて楽しめる作品が少ない印象で、行ってみたいと思わせるものが他の芸術祭と比較すると足りないように思う。また、市民の芸術祭への温度感も大事で、来訪者に対するウェルカム感がなかった。会場へのアクセスと料金も重要で、過去の「水と土の芸術祭」では、パスチケットの購入が必要で、家族で行きたくても、出費が高くて、財布を握っている家人が紐をきゅっと結んでしまう。玄人向けに響く作品はあっても、ファミリーだと行けず、結局単独で見に行くしかない。2018年の最終日にNEXT21のアトリウムで開催していた紙相撲は、参加型のイベントで非常に面白かった。しかし、情報の発進力が弱いために、観客が少なく、もったいなかった。

●この芸術祭を通して、新潟市が何をしたいのか、どういう目的や理念があるのかわからない。みずつちの基本理念に重きを置いて欲しい。2009年、2012年はとても好きだったし、良いと思えた。2015年以降、市民を中核に置くと言いながらちゃんとした広報やフォローができていなかったと思う。市民の活動をすくい上げる仕組みをもっとしっかりとして、ちゃんとしたフォローアップをして欲しかった。また、市民にとってどういうアートがいいのか、意見交換がされても、それがすくい上げられることがほとんどない。例えばディレクター選定について市民からいろんな意見が出されても、最終的にはそうした意見が反映されることはなく、市長に一任されてしまった。なぜこのディレクターか、どういう考えと経緯で選ばれたのかについての開示もなかった。開港150周年の節目にふさわしい人は誰かなど、もっと深く話し合いをし、詰めていければ良かった。みなとまちの歴史を感じてもらう仕組みの提案もしたがあまりうまくいかず、もどかしかった。開催会場をコンパクトにするため、新潟島を舞台にという話だったのに、結局は鳥屋野湯も含まれ、しかもアクセスもあまり考えられていなかった。限られた本数のバスの運行しかなく、車がなければ行けないような仕組みは改善するべき。タイの作家さんの作品は、映像と絵を見る構成でとても良いと感じた。しかし肝心の会場が非常に見づらい状況になっていて、もったいなかった。工夫が欲しい。「にいがたJIMAN」は良かったが、しかし芸術祭の中でやるべきものだったのか、疑問が残る。市民プロジェクトの補助金が5分の4になってしまったのも不満。市民が主役と言いながら、主役になっていなかったと感じる。地域拠点プロジェクトもうまく機能できなかった。本当は各拠点でそれぞれの情報が得られるようにしたかったのだが、余裕がなかったのか、他団体との情報共有や関係性がうまく作れなかった。考え方はいいのに、実現につながらなかった。全体として広報の仕方にも課題が多いと感じる。タイミングが遅いし、うまく伝わりきれなかった。市民がどこで情報を得るのか、リサーチが必要だと思う。ただ、みずつちをきっかけに新潟を知ろうと考える人たちが増えたのは良かったと思う。

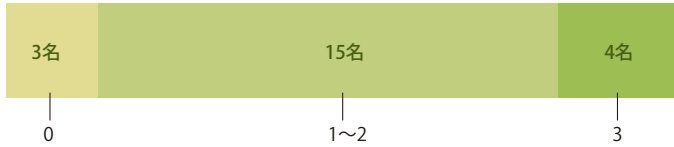
●評価はしない。第1回の責任を誰もとっていないのに、まだそんなことをしているのか、と感じている。そもそも芸術祭は行政主導でやるべきものではない。自発的に活動をする個人がまずあって、財団や行政はそこに対して助成を行うのが本来あるべきかたちだと考えている。たとえば、市民が自宅のガレージを開放し、そこで作品を展示するといったことを支援するのもいい。そうしたことにこそお金を使うべきで、先に金ありきという考え方はふさわしくない。

●2012年は多く関わったが、それ以降はあまり見ていない。作品や作家に対してはいくつか、関心を持っているが全体としては疑問を感じている。

設問7-② 「水と土の芸術祭」以外で訪れた、もしくは関心のある芸術祭

新潟県内の芸術祭

〈複数回答であげた芸術祭の数〉

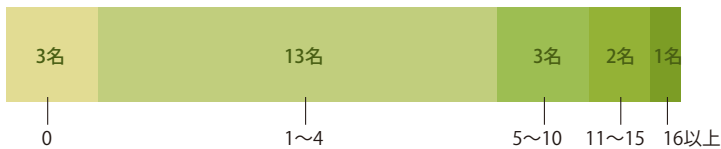


〈具体的な芸術祭名〉※()は芸術祭名をあげた人数

- 越後妻有大地の芸術祭(18)
- さどの島銀河芸術祭(7)
- ヤングアート長岡 芸術工事中(3)
- 工場の祭典(1)

新潟県外の芸術祭

〈複数回答であげた芸術祭の数〉

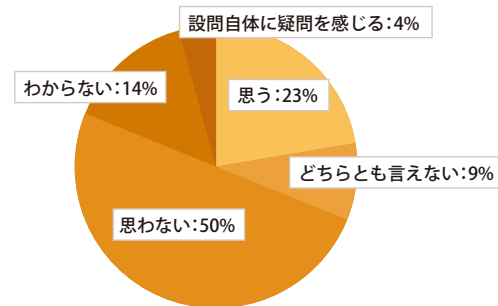


〈具体的な芸術祭名〉※()は芸術祭名をあげた人数

- | | | |
|------------------------|----------------------|----------------------|
| ●中之条ビエンナーレ国際現代芸術祭(8) | ●biwakoビエンナーレ(2) | ●はならあと(1) |
| ●瀬戸内国際芸術祭(8) | ●京都国際現代芸術祭(2) | ●金沢文庫芸術祭(1) |
| ●北アルプス国際芸術祭(8) | ●原始感覚美術祭(2) | ●プロジェクトFUKUSHIMA(1) |
| ●みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ(7) | ●ゼロダテ(2) | ●東京デザイナーズウィーク(1) |
| ●ヨコハマトリエンナーレ(7) | ●いちはらアート×ミックス(2) | ●芸術祭『Fiction』(谷中)(1) |
| ●あいちトリエンナーレ(7) | ●つまづく石の縁(1) | |
| ●リボンアート・フェスティバル(5) | ●真鶴まちなーれ(1) | 国外の芸術祭 |
| ●六甲ミーツ・アート(4) | ●種子島芸術祭(1) | ●ヴェネツィアビエンナーレ(3) |
| ●奥能登国際芸術祭(4) | ●大館北秋田芸術祭(1) | ●光州ビエンナーレ(2) |
| ●別府現代芸術フェスティバル(4) | ●国東半島芸術祭(1) | ●台北ビエンナーレ(2) |
| ●さいたま国際芸術祭(4) | ●伊豆高原アートフェスティバル(1) | ●ドクメンタ(2) |
| ●札幌国際芸術祭(3) | ●岡山芸術交流(1) | ●台湾桃園藝術節(1) |
| ●百五十年の孤独・カオス*ラウンジ(3) | ●六本木アートナイト(1) | ●ミラノサローネ(1) |
| ●茨城県北芸術祭(3) | ●TRANCE ART TOKYO(1) | |

◆生活と美術・アートについて

設問8 新潟市において美術やアートと市民生活は現在深いつながりを持ち得ていると思うか



設問8-① 思うと答えた方 その理由

- 深いかわからないが、つながりはあると思う。芸術祭が開催された場所で、「ああ、また芸術祭ね」という言葉が出ることで、つながりがある証拠と言えるのではないかな。
- 生活の中に取り入れる要素としては、つながりはあるのではないかな。そのつながりが深いかわからない。
- 新潟市というより一般的な話となるが、その人が人生において培ってきた手法や道具を専門的に突き詰めていったのが美術であるならば、美術は普段の生活につながるものであり、自分の生活を見つめることで生まれるものであると考える。一般の人が自分と同じように捉えているとは思わないが、自分の考えでは、美術は市民生活と密接なつながりを持ち得ていると思う。
- 周囲を見ていると、みなさん多趣味で余暇活動を満喫されている感じがする。音楽鑑賞やフラダンスを習うなども含めて、総合的な表現活動に関心を持つ人が多い。一方で、「美術」や「アート」となると途端に距離を感じる人が多く、美術に限らず、普段馴染みのないものに対しては、最初様子を見る感じがある。西蒲区で開催されたわらアートのイベントも当初は地域の中ではあまり話題にならなかった。「水と土の芸術祭」の招待作家や武蔵野美術大学の学生など、作品制作のために地域に滞在することで、地元の人との関係性ができ、作品そのものに対してというよりも、知り合ったその人のつくったものを見に行く、という身近なところからつながっていきやすい。まず、人と人との関係性が必要ではないかな。
- 水と土の芸術祭では市民プロジェクトで参加したが、そこに関わる人たちは、美術・アートに関心が高い人が多かった。一方自分の職場の人を見ると、関心がない人が多いように感じる。ちょっとした「きっかけ」で関心がない人も楽しめると思います。私がそうだったように。
- 生活者の活動＝アートであると考えている。自身の中からでてきたものを表現する、その行為自体がアート。アートは生活と切り離すことはできない、そもそも密着したものだ。最近、アートブリュット等という名前でもてはやす傾向があるが、作品をつくった、描いた本人ではなく、まわりが付加価値をつけて商売しているようで、非常に憤りを感じている。

設問8-② 思わないと答えた方 今後、新潟市において、より美術やアートと市民生活が関わりを深めていくにはどんなことが必要だと思うか

- 小さいころからもっと美術やアートに触れる機会が増えるといい。「美術」や「アート」は実は幅が広いのに、教える側がそれを限定し、ハードルを上げているように感じる。
- 子どもの頃、身近に何があるかで違ってくると思う。成長する中で自然と熟成されるものがあると思う。
- 裾野を広げる活動が必要だと思う。最初のきっかけがつかめれば、皆自分の好きなものを掘っていくはず。そのとっかかりを得る機会があまりにも少ない。気軽に作品を見たり買えたりする場や作品を発表する場があった方がいいと思う。
- 一部の市民は関心や関わりを持っていると思うが、広がりが少ない。関心を持ってもらうのは難しいが、そのきっかけをどう作るかが課題だと思う。本質を理解してもらうのは難しいが、まず壁をなくすためにどうすればいいか。文化という範囲で考えれば、例えば食文化を入り口にするなど、角度を変えた工夫が必要だと思う。一瞬で変わるようなことはあり得ないので、工夫をしながら続けていくしかない。
- すぐに結果が出るものではない。これまで様々な団体が活動してきたことをクールに分析してほしい。また、ネガティブな意見を反映できるよう洗い出し、失敗体験を次に活かせるよう取り組んでほしい。良いことも悪いこともオープンにし、今後につなげてほしい。
- 良い方法があったら教えてほしい。伝統文化から美術やアートに繋げる動きがあってもいいのでは。地域にもともとある文化を美術につなげていけば、入りやすい入り口になるのではないかな。作るプロセスも大事だ。
- ギャラリーをめぐることを観光目的のひとつとするなど、一般の人にわかりやすくする取り組みをおこなって欲しい。たとえば料理とアートなど、関心を持たせるきっかけづくりが必要ではないかな。
- 新潟にも、工芸を含め作家が多くいるのに出会える機会が少ない。ゆいぽーとのレジデンスなどは手段のひとつとして良いと思う。アートのワークショップなどの機会がもっと増えたらよいと思う。新潟はまちづくりやまちあるきに関心を持つ人は多いのに、アートに関心を持つ人が少ない。両者がうまく融合していけたらいいのではないかな。全国的な問題になっている空き家や空き店舗を活用し、まちなかのアートイベントを新潟で開催できないだろうか。
- 新潟市だけでなく、世の中自体で、アートがビジネスとなり、一般に浸透している。作品の意味を理解しているのかどうかは別とし

て、アートに興味のある人は昔より多い。パソコンとインターネットが一般化したことで、特別なものではなくなった。ワークショップもDIYもなんでもアートのような印象。インスタで独自の画像や映像を投稿することは特別ではなく、そういう意味ではアートが生活に馴染んでいると言える。ギャラリーに行かなくても、楽しめる機会が増えている。例えば大地の芸術祭は、「旅行+好きなもの+時間つぶし+体験+地域文化」を組み合わせたものと言えるし、フジロックフェスティバルは「音楽+旅行+ファッション+自然+体験+仲間」というような感じで、時代を理解しつつ編集がうまく、発信も含めて「この瞬間を非日常を音楽的アートで楽しむ」ものとなり、とてもわかりやすい。一方で、ギャラリーで扱う作品は、購入後に大事に長い時間室内に飾ってほしいものであり、世間の人たちのニーズが多様化する現代においては、ギャラリーも美術館も武器が足りなすぎる。少数派で、哲学を持ち、実績という歴史を持つ人達が、朱鷺のように保護され、残るシステムが必要なのかも。

●不可能だと思う。結局は個人の志向であり、誰も強制はできない。岡本太郎が危惧した「アートは特別だという敷居」はそのまま50年経っても変わらず、日本人に染み着いた感覚だと思う。その他のエンターテインメントが充実していることもあり、市民生活と関わりを深めることはできないと思う。

●市民生活とアートの深いつながりに関しては難しいと思うが、「アート」というものを身近(生活圏内)に提示し続けることで、そういうものを好む人(受け入れられる人)を少しずつ増やすことはできると思う。

●関わりを深めるとはどういうことなのか分からないが、美術館に用がないと決めている人は、すでに美術館に行くという選択肢がない。ただ、アニメや漫画関連の展覧会は盛況で、バーチャルの世界を楽しむ人が、美術館に足を運ぶきっかけとなっている。その場所に足を運ぶ、ということに意味があるのではないか。一度足を運ぶと、その先がある可能性があると思う。

●明治以降、美術が「ありがたいもの」になってしまった。美術と言われると「オレ、頭悪いすけ〜」というところがある。普通に楽しむ事ができず、限られた人しか関わるができなくなっているように感じられる。

●点で存在しているものを、アートで結びつけることが大事。新潟の文化は、市民生活と関わりが深いと思う。文化に関わりが深い人の中には、美術が好きな人たちもいる。その人たちを中心に他の活動団体をアートと結びつけることで、例えば障がいのある人たちが、古町に来て町を歩くきっかけとなったりする。開港150周年を迎えるにあたり、他の開港都市は西洋文明の影響を色濃く受けており、新潟も受けてはいるが、花街の存在など、「和」のイメージが残っている。その花街にいる芸妓さんについても、よく調べると、そこには文化があるとわかる。そのような、既存の文化とアートを結びつける試み、例えば、仏壇技術を応用した、金箔を使ったネイルアートや、伝統工芸とは趣を変えた漆器体験など、すでに行われているが、このような文化とアートを結びつける取り組みが必要だと思う。

●「水と土の芸術祭」や新潟市美術館があるが、市民生活との関わりについてはわからない。自分の周りの人は楽しんでいるが、それが市全体として、3%なのか30%なのか不明。その割合も4回にわたる芸術祭で増加したのか低下したのかもわからない。自分の親世代は美術への関心が低くなく、古い画廊も残っている。ただし、年配の方が経営する画廊と若い作家の間で衝突があり、若手がこぼしているのを耳にする。自分の親世代の美術好きな層と自分の周りにいる若い層が乖離している。新潟市美術館や万代島美術館がそれに当たると思うが、両者をつなぐ役割が重要だと思う。

●客観的に見て、周りに関心を持つ人があまりいないと感じている。興味を持つ人は一定数いるし、美術館にも多くの人が入って熱心に作品を鑑賞している。だが、世界的評価を得ているような有名作家の展覧会は行っても、無名の人々の展覧会には行かないという人も多い。入り口をどう作っていくか、きっかけづくりが必要ではないかと思う。多くの人が興味を持つもの、例えば食など、一般の方が関わりを持ちやすいものを入り口にする方法もいいのではないか。学校教育を変えていくのも大事なことだと思う。自分自身、学生時代は美術の時間が嫌だった。絵を描かされて、それを採点されるのが苦痛だった。それよりも、絵画などの作品の背景や歴史など学べたら興味も持てたし、面白かったのに、と思う。一枚の絵を見て、どう感じるかディスカッションをするとかだったら、もっと身近に感じられたと思う。本来、新潟の文化度は高いと思う。他県の芸術祭担当者から評価も得ているし、全国サポーターズミーティングを始めたのも新潟だ。若い世代から70代の先輩まで、幅広い年代の方達から、みずつちがきっかけで活動をするようになったという声も聞いている。美術やアートは大事なものだと思う。「芸術祭」というコンテンツはなくして欲しくない。新潟は文化も歴史も面白いものが多い。芸術祭をなくすと、そうしたものに触れる機会、知るチャンスが失われるのではないかと危惧している。もちろん開催方法は考える必要がある。「水と土の芸術祭」がなくなっても、市民レベルでやれないか考えている。

●新潟では、あまり身近ではないと思う。焼き物の産地のように、普段から陶芸作品がそこにあるというような環境はないし、そもそも新潟市は文化水準があまり高くないと思う。普段遣いをするものに対して文化性が低い。器にお金を使わない人も多い。飲食店でも食器に気を使っていない店が多い。

●大量生産のものを使って良しとする人もいれば、そうではない人もいる。そこは人それぞれだと思うが、イタリアでは暮らしぶりがアートと深いつながりがあると感じた。たとえば、夕食後にウインドウショッピングだけのために出かけたりする。お店も、夜のショーウインドウを楽しんでもらうためにディスプレイし明かりもつけている。誰もいないのに無駄と思うかもしれないけれど、そういう部分にお金を使う文化があると思った。食器にもこだわりを持っていて、そういう生活文化を垣間見た。少し話が違ってもいいかもしれないが、インスタ映えすると話題になっている福岡県の糸島市で、JR筑前原原駅にグランドピアノが設置されている。何が起るかわからないという期待が込められていて、実際のいろんな人が自由に弾いているが、想像するに、新潟駅に設置しても誰も触ろうとしないのではないかな。新潟人の気質として、事なかれとか、目立つことを嫌がるとか、そういう部分はあるように思う。